

新古改撰誌記 卷之三

〔朱書〕
「百五拾九」

文政十一子年正月九日差出ス、御供古沢茂右衛門口上を以池田修理殿江申上置

以書付奉申上候

一、今九日 内府様木下川筋江 御成御前夜四半時頃浅草寺地中
法善院地内伝兵衛店內より出火仕、花川戸町・山之宿町河岸迄
類焼仕今曉七時頃相鎮申候、依之 御成御道筋御差障相成可
申哉、此段御届奉申上候、以上

正月九日

山之宿町出役
山田八十郎

〔朱書〕
「百六拾」

文政十亥年八月七日御扣共三通月番五郎兵衛殿江口上添差出、同
九日近江守殿御附札を以伺之通被仰渡候段、九郎右衛門殿立合五
郎兵衛殿被申渡

御中間御暇奉伺候書付 月番 御手洗五郎兵衛
小田切土佐守

覚

御切米

一、拾五表

忝人扶持

部屋住御抱入之者

関口彦惣
亥三拾歳

鈴木宇右衛門組御中間

関口善蔵養子

同人組同断

右彦惣儀勤方不宜、其上組頭共申渡候義相用不申身持不取締之
者ニ御座候間、御暇差遣可申哉奉伺候、以上

亥八月

御中間頭

鈴木宇右衛門

〔朱書〕
「右伺取調ニ付承合候類例」

〔朱引〕

文政四巳十一月廿五日作右衛門殿江出ス、同廿八日近江守殿御
附札を以伺之通被仰渡

源八郎儀勤方不宜、其上組頭共申渡候義等閑ニ仕不慎之者

ニ御座候ニ付、組中風儀ニも拘り末々難見届者ニ御座候間、
御暇差遣可申哉之伺

同年三月廿日源六郎殿弥八郎殿江出ス、同廿一日紀伊守殿御附
札を以伺之通御暇被仰渡

御掃除頭村井組小島仁三郎御奉公不勤、其上組頭共申渡候
義相用不申者ニ御座候ニ付、御暇差遣可申哉伺

亥八月十日御扣共式通例書志通添御当番十郎右衛門殿江差出、後
刻遠江守殿御附札を以不及押込旨被 仰渡候段、伊賀守殿立合十

郎左衛門殿被申渡

御中間押込伺

覚

深谷十郎右衛門(左)

鈴木宇右衛門組

御中間

関口善藏

右善藏養子同組御中間関口彦惣昨九日御暇被仰渡候、依之養父

善藏儀押込置可申哉奉伺候、以上

亥八月十日

御中間頭

鈴木宇右衛門

御附札

不及押込候

例書

鈴木宇右衛門組

御中間

宇佐美勇右衛門

右勇右衛門倅同組御中間宇佐美雄作御暇被仰渡、父勇右衛門儀

押込伺文政五年六月十二日差出候処不及押込旨周防守殿被仰

渡候

亥八月

御中間頭

鈴木宇右衛門

(朱書)

〔此書面不用相成候得共以後為見合留置〕

(朱引)

御中間関口彦惣出奔之儀申上候書付

月番

御手洗五郎兵衛
小田切土佐守

覚

御切米

一、拾五俵

忝人扶持

部屋住より御抱入之者

関口彦惣

同組同断

鈴木宇右衛門組御中間

関口善藏養子

亥三拾歳

右彦惣儀文化十三年四月御中間明跡江御抱入被 仰付相勤罷

在候処、当月六日晝不斗罷出相帰り不申候二付、所々相尋候処

相見不申候旨届差出候間吟味仕候処書置等も無御座、兄弟并親

類共不和成儀も無之候、乍去常々身持不宜候二付度々異見差加

候得共相用不申候間御暇可奉願存罷在候者二御座候、勿論過分

之借金等其外出ケ間敷義無御座候処何故出奔仕候哉、曾而心

当り無御座候旨養父善藏并親類・仲ケ間組合之者銘々口上書差

出申候二付、猶又無油断相尋候様申渡置候処、今以行衛相知不

申候旨申聞候、依之申上候、以上

御中間頭

鈴木宇右衛門

亥八月

御中間関口彦惣親類書

覚

鈴木宇右衛門組御中間

関口善藏養子

同人組同断

関口彦惣

亥三拾歳

高拾五俵

忝人扶持

私儀文化十三年四月御中間明跡江部屋住より御抱入被 仰付

候旨京極周防守殿被仰渡候段、御目付内藤隼人正立合富永三郎

右衛門申渡候旨御中間頭末次佐吉申渡、仲ケ間触番之者相勤、

其後段々頭替、文政三辰年八月鈴木宇右衛門組ニ罷成、当亥年迄御奉公拾貳年相勤罷在候

(朱引)

親類書

- 一、養祖父 御中間相勤罷在候処、
文化五辰年七月病死仕候 関口惣次郎死
- 一、養祖母 武州久曾ヶ谷村百姓祖母義、
寛政七卯年四月病死仕候 三郎右衛門死
娘死
- 一、養父 御中間相勤罷在候 関口善蔵
- 一、養母 武州川越領百姓 庄蔵妹
- 一、姉 父善蔵手前罷在候 式人
- 一、大伯父 武州久曾ヶ谷村百姓 八五郎
- 一、大伯母 武州横山宿百姓 八郎兵衛妻
- 一、従弟違 御中間相勤罷在候 関口四郎三郎
- 実父方
 - 一、祖父 表小間遣相勤、
享和四子年病死仕候 藤波喜三郎死
 - 一、祖母 武州下谷中百姓 権兵衛死娘死
 - 一、父 甲府勝手小普請 藤波万平
 - 一、母 田安小人目付相勤罷在候母義、
文化十三子年閏八月病死仕候 斎藤紀内娘死
 - 一、兄 病氣ニ付文政三辰年八月奉願
惣領除仕候、甲府表父万平方ニ罷在候 藤波万次郎
 - 一、弟 甲府表父万平方手前ニ罷在候 藤波茂三郎
- 右之外親類縁者無御座候、以上

文政十亥年八月

例書

鈴木半十郎組御中間
覚太夫養子
同人組同断

江守勝次郎

右勝次郎儀享和三亥年六月廿一日出奔仕候ニ付、同廿九日御石書月番江差出候処、養父覚太夫并御中間五十嵐清助従弟同断石原久七江尋出候様、立花出雲守殿被仰渡候

御中間頭

鈴木宇右衛門

亥八月

御届申上候覚

一、倅彦惣義不束之儀有之候ニ付去ル五日慎被 仰付候間殿敷申付置候処、同夜七時頃出奔仕候哉相見不申候ニ付、所々相尋候得者、昨夜四時過本所緑町ニ而見当り候間連帰り締り申付置候、依之此段御届申上候、以上

亥八月九日

親類

関口善蔵

印

関口四郎三郎 印

鈴木宇右衛門殿

覚

一、御組関口彦惣儀慎被 仰付御座候処家出いたし相見不申候ニ付彦惣父善蔵俱々相尋候処、昨八日夜四時過本所緑町ニ而見当り候ニ付早速同人江申聞候処連帰り締り申付置候、此段申上候、以上

亥八月九日

小島東助

印

鈴木宇右衛門殿

入置申一札之事

此度貴殿ニ対し関口彦惣義法外之事有之、既 公辺御沙汰ニも可相成処、格別御仁心を以御仲間一同厚御評議被成下、内済ニ御取計被下置、私ニおゐて一同御蔭を存候、彦惣義者只今至重々奉誤御憐愍之段偏難有仕合奉存候、右ニ付以後殿敷慎方左ニ申上候

加州御家三御屋敷

一、御仲間住居之場所江徘徊為致申間敷候事

同御屋敷

一、拾町四方之内江彦惣義住居為仕間敷候事

一、女之儀者親元江対し貰受候杯及懸合候義、決而為仕間敷候事

一、前書之始末ニ付貴殿江対一件差発候ハ、御勝手次第以後御取計可被成下候事

一、此後法外之始末御座候ハ、公辺之御沙汰ニ相成候共、聊以

申訳無御座、如何様共貴殿方御取計を違背仕間敷候事

右之趣急度為相慎候ニ付御聞済を以御勘弁被成下、御慈悲難有仕

合一同ニ奉存候、為後日一札仍如件

文政十亥年八月五日

関口彦惣 印

父

関口善蔵 印

加州御家薦

松次郎殿

同

御仲間衆中

覚

別紙之通関口善蔵父子共一件之始末、重々奉恐入御託申呉候様私共迄種々難渋申間候ニ付、此度之儀者何卒御勘弁御取計御聞済

被下候様相頼候、以上

文政十亥年八月五日

地主 大橋弥惣次 印
荒井林之助 印

加州御家薦

松次郎殿

同

御仲間衆中

入置申一札之事

此度貴殿御地面ニ住居仕候加州家薦松次郎与申者方江関口彦惣儀立入法外之始末有之、既 公訴ニも可相成、且者三御組之御外間ニ拘り候義出来難計候処、大橋弥惣次殿并御地面之事ニ付貴殿も格別ニ御取計被成下、殊御兩人ニ而御印形御座候事故、首尾好穩ニ相済一同忝仕合奉存候、右ニ付而者前書松次郎方仲ケ間共江差出置候一札之通相違無御座候、此以後聊以御苦勞相掛申間敷候、為後日仍如件

文政十亥年八月

関口彦惣 印
関口善蔵 印
小島東助 印

荒井林之助殿

一、彦惣義七月晦日朝六半時頃松次郎宅ニ而被差押、同日八郎左衛

門義昼八時頃懸合之上彦惣を受取自分宅江預り置、八月五日内

済ニ相成候事

(朱書)

「百六拾壹」

以書付奉願候

私共儀遠 御成之節、在方人留出役被 仰付罷在候処 御成御

道筋 御見通之御場所も有之候間、御当日未明より村・町共見廻り仕、御場所ニ寄村数七八ヶ村余も持場御座候間、見廻り候得者私ニも差掛候節、御徒方退候様申間候義有之、左候得者見廻り行届兼、且者 通御ニ相成候御場所者私後迎も見廻り不仕候而者御取締ニも相成不申、然ル処持場内 通御ニ相成候御場所異変等有之候節者所役人共より申出、其御取計差図致候ニも差支ニ相成、其上所役人共者私ニ而引取候様ニ而者外見も如何ニ御座候間、自分所役人共示ニも相響御取締ニも相拘可申哉、寛政四子年十二月伊豆守殿被仰渡候者、是迄御代官ニ而出役為致候処右者不輕御取締筋之儀ニ付、向後御目付方江被 仰付候旨ニ御座候、御威光を飾り候義ニ而者無御座候得共、私前後共 御見通御場所ニ而も以来見廻り之節差掛り候得者其場所江見計平伏仕度奉存候、左候得者格別御取締ニ茂相成、勤方弁利宜御座候間、兼而御目付衆より御徒頭衆江御達御座候様仕度奉存候、以御賢慮御評議之上可然様被仰上被下置候様仕度一同評義之上此段奉願候、以上

文政十一子年二月

在方人留出役

池野谷半五郎 印
 荒井卯之吉 印
 山田八十郎 印
 久保田円吉 印
 坂本清十郎 印
 栗島藤十郎 印
 宇野金八 印
 小沢喜太郎 印
 川口九八郎 印

下ケ札

御鷹野 御成之節御場内人留之儀御代官手代出役仕候処、不輕御取締之筋ニ付向後御目付方支配之者差出御取締為仕、尤村方之者只今迄仕来振合之通相心得御目付方差図ニ応、差支無之様可取計旨、寛政四子年十二月伊豆守殿御書付を以被仰渡候間、御目付矢部彦五郎殿より御書面を以若年寄衆・御側衆江被仰上、御小納戸頭取衆・御鷹匠頭衆・御賄頭・御鳥見組頭江御達御座候由

古沢茂右衛門殿
 鈴木宇右衛門殿
 山崎又兵衛殿
 杉山八之助殿
 兼松弥助殿

加藤啓十郎 印
 舟川多四郎 印
 萱野弥之助 印
 長田八五郎 印
 兼松八三郎 印
 田野村弥六 印

寛政四子年十二月

伊豆守殿御渡御書付写

御目付江

御鷹野 御成御当日御場内人留之儀只今迄御代官手代致出役取計候処、右者不輕御取締之筋ニ付向後御目付方江被 仰付候間支配向出役為致御取締可申候、尤村方之者共只今迄仕来候振

合之通相心得、御目付方差図ニ応し差支無之様可取計旨申付候間、得其意委細之儀者関東郡代江可被談候

十二月

寛政四子年十二月

伊豆守殿御渡御書付写

御目付江

御鷹野御用一件只今迄御勘定奉行ニ而取扱候処久世丹後守関東郡代兼役被 仰付候ニ付、右一件丹後守引請取計候様被 仰付御勘定奉行より引請相済候間右御用筋者以後丹後守江可被談候、尤 御成御当日御場内江人留之儀是迄御代官ニ而出役為致候処、右者不輕御取締筋之儀ニ付、自今御目付方江被 仰付候間右支配之者出役可致候、其外之儀者只今迄之振合を以猶更万事取計方省略致候様申渡候間、向々ニ而も可成丈勘弁致し委細之儀者丹後守江可被談候、且差掛り夜分等申達候義も有之候節者、郡代支配御代官伊奈友之助・大貫次右衛門・篠山十兵衛・三河口太忠・菅沼安十郎江可被談候、右之趣被得其意町奉行・小普請奉行・御徒頭・御船手・御鷹匠頭・御賄頭・御馬方・浜御殿奉行・御台所頭・御鳥見組頭・吹上奉行、其外ニも掛合有之候向々江不洩様可被達候

十二月

右願書壹通御書付写式通添子二月十一日差出ス

(朱書)
「二百六拾式 百八十八、百九十三組合」

子二月十一日絵図面添差出ス

以書付奉願候

去月廿五日木下川筋江 内府様 御成之節私儀在方為人留千住宿江出役仕持場見廻り橋戸町ニ休息仕罷在候処、同町名主伝右衛門・年寄信藏申聞候者、先刻美濃部八藏殿組御徒山県三郎四郎罷越候而河原町繩手江繩張致候様申聞候由、然ル処是迄木下川筋・龜有筋 御成之節右場所繩張致し候義無御座候得共、当所江御目付方在方出役御座候間右出役江懸合御座候様、名主伝右衛門・年寄信藏より山県三郎四郎江申答候処、御目付方者橋之出役ニ御座候間、掛合筋ニ無之旨山県三郎四郎申聞候由ニ而如何可仕哉之旨伝右衛門・信藏より私江申出候、右者御徒方より私江懸合有之候ハ、在方心得方を以談合可仕候得共掛合筋無之旨御徒方ニ而者相心得罷在候故談合も仕兼、右故差図ニ者無之候得共、繩張之儀者勝手次第可仕旨伝右衛門・信藏江申談、千住大橋・小塚原町・繩手通見廻仕大橋迄罷帰候、途中ニ而信藏申聞候ニ者先刻参り候御徒方対談之通、只今繩張可仕旨申渡候ニ付早速繩張仕候処、無程外御徒方参り最早 還御相済候間繩張取払、往来相通可申旨申渡候ニ付、如何可仕哉之趣伝右衛門私江申聞候得共、未 還御ニ者有御座与奉存候ニ付、只今より定例之場所繩張為仕往来差留候様申渡候処、先刻 還御相済候趣ニ而御徒方引取候間、最早往来繩張ニ不及与奉存候旨伝右衛門申聞候得共、先刻繩張為致無程往来附候様申渡御徒方引取候義余り御間合無之事

故、何分難心得奉存候ニ付無油断往来差留置候様申渡置候、追

而橋場町出役萱野弥之助より只今 還御御拵之趣申越候間、御

程合見計候上ニ而往来相通申候、前書之御徒方繩張取拵往来附

候様申渡候節、私差図ニ而繩張為仕置候間手違も相成不申候、

然ル処伝右衛門申聞候ニ者以来繩張之儀ニ付在方出役差図を請

可申哉、御徒方差図受可申哉、前書之趣ニ而者所役人共相困り

申候間品ニ寄支配江伺出可申由申聞候、私共人留出役之儀者寛

政四子年迄御代官ニ而出役取計候処、右者不輕御取締之筋ニ付

向後御目付方江被 仰付候ニ付、伊豆守殿御書付を以被仰渡相

勤候義ニ而御座候処、御徒方ニ而者橋々之出役与而已相心得候

者ニも可有之、私共より打合申度義御座候而も相整不申万事不

都合成儀ニ奉存候、先年龜有筋江 御成之節千住宿在方人留

出役彦坂平太夫繩張之義ニ付、前書組筋之御徒方不当之挨拶等

仕候義も有之、一躰御取締筋之儀者相互ニ厚く相心得弁理宜様

相勤可申処、兎角行届不申事共ニ奉存候、御威光を飾り候義ニ

者無御座候得共、所役人江対し候而も不取極之様相見候得者自

分御取締筋ニも相拘り見躰も不宜奉存候間、以来前書申上候様

之義勤方相遂候様、御目付衆より御徒頭衆江御掛合御座候様仕

度奉存候、且者名主伝右衛門より差図受候儀ニ付支配江伺候義

も可有御座哉与奉存候、旁以不得止事此段奉願候、以上

文政十一子年二月 在方人留出役 御小人頭 六人連名殿

前書田野村弥六申上候通、私共一同評議仕此段奉願候、以上

在方出役

文政十一子年二月

拾四人 連印

御中間頭
御小人頭
六人連名殿

ここに挿入図あり(巻末参照)

(朱書)
「百六拾三」

以書付申上候

一、今七日昼八ツ半時頃御納戸口御門内ニ押足輕躰之もの参り御側

衆佐野肥前守殿挾箱江寄掛り罷在候ニ付、御同人御家来右之者

御番所江連参り預ケ置候旨申聞、尤其節者御老中方御廻りニ而

御番所前混雜仕右躰之もの紛れ入候義一向ニ見落候段甚以恐入

奉存候、此段御尋ニ付申上候、以上

(朱書)
「文政十一子」四月七日

西丸御納戸口番
和田斧三郎
長坂新五郎

右者西丸御納戸口前ニ而押足輕躰之もの何れより紛れ入候哉存

知不申候処、佐野肥前守殿供頭より右之もの御納戸口番江預ケ

候ニ付内々取扱頼置候内、肥前守殿より西丸当番御目付細田小

兵衛殿江御沙汰有之、夫より御糺有之候処、西丸大手より入候

由ニ付御門々々糺ニ相成、右之ものハ町奉行江引渡ニ相成候事
一、右紛レ入候ものハ高家武田左京太夫法皮着^(被)用いたし居候而脇差

一刀計指居候由、下着ハ三浦之法皮着候由、御長屋御門江引連
差置、御小人目付等勤番いたし置候由ニ候事

子四月八日西丸前日御当番細田小兵衛殿江御扣共式通差出、後
刻永井肥前守殿御附札を以先不及押込旨被仰渡候段、牧野中務
殿被申渡、書面左之通繕付返上

御附札之通被仰渡、
尤為慎置可申旨奉承知候

御中間頭
四月八日 古沢茂右衛門

御中間押込伺

覚

古沢茂右衛門組御中間

西丸御納戸口前御門番

長坂新五郎

鈴木宇右衛門組同断

同断

和田斧三郎

右者昨七日昼八半時頃御納戸口前御門内江押足輕躰之者参り御
側衆佐野肥前守殿挟箱江寄掛り罷在候ニ付、御同人御家来右之
者御番所江連参り預ケ置候旨申聞、尤其節御老中方御退出ニ而
御番所前混雜仕右押躰之者紛レ入候義見落候段甚以不行届不調
法至極奉恐入候旨申聞候、依之押込置候様可仕候哉奉伺候、以
上

子四月八日

古沢茂右衛門
鈴木宇右衛門

同月九日差出ス、同十九日慎差免候様細田小兵衛殿被申聞

覚

古沢茂右衛門組御中間

西丸御納戸口前御門番

長坂新五郎

鈴木宇右衛門組同断

同断

和田斧三郎

右者一昨七日昼八半時頃御納戸口前御門内江押足輕躰之者参り
御側衆佐野肥前守殿挟箱江寄掛り罷在候ニ付、御同人御家来右
之者御番所江連参り預ケ置候旨申聞、尤其節御老中方御退出ニ
而御番所前混雜仕右押躰之者紛レ入候義見落候段甚以不行届不調
法至極奉恐入候旨申聞候、依之右番人押込伺翌八日西丸細田小
兵衛殿江差出候处、後刻肥前守殿御附札を以先不及押込旨被仰
渡旨、牧野中務殿被申渡、且為慎置候様被仰聞候ニ付此段申上
置候、以上

四月九日

御中間頭

古沢茂右衛門

山崎又兵衛

(朱書)

「百六拾四」

同年六月十四日

西丸江私共御小人頭詰所無御座 内府様御規式・遠御成・御定
日其外にて 御本丸江 御入、吹上 御成御供并御用ニ付罷
出候節ニ者西丸御長屋御門御番所ニ罷在候得共甚手狭ニ而、殊
ニ西番所ニ罷在且者御用ニ付罷出候砌者、其時宜寄書物等仕候
儀も御座候得者、組之者見張場所ニ而者品ニ寄難認書物等も御
座候間

御本丸江引取相認メ候上ニ而猶又 西丸江罷越候儀も有之、
短日之時分者猶更不都合ニ而御用弁等も不宜甚心配仕候儀も御
座候ニ付、書物所之儀兼而可奉願段内評も仕候得共可申上御場
所も無之候間、追而御修復御座候節可相願奉存差扣罷在候処、
此度右御門御番所等迄も御修復御座候由ニ付、可相成者同所ニ
有来志間ニ九尺之物置ニ階御座候間、右之所北之方江壹間程ニ
階繼足、南北江明り窓壹ヶ所新規御明ヶ被下置候様仕度奉存候、
左様無之候而者一躰ニ階上御屋根明り取無御座候間、別紙絵図
面懸ヶ紙朱引之通出来候様仕度、此段奉願候、以上

子六月

御中間頭

三名

ここに挿入図二図あり(卷末参照)

文政十一年九月西丸より申越左之通

先達而御差越有之候西丸御長屋御門ニ階并繼足明り取窓之儀、
肥前守殿江被仰上候処、難相成旨御書取を以被仰渡候ニ付、其
段御達申候様小兵衛殿被仰聞候間、則御願書・絵図面并御書付
写差進申候、以上

九月二日

御中間頭中

近藤新吉
大森大三郎

別紙書面・絵図面を以願之趣肥前守殿江申上相願候処、難
相成旨御同人御書取ヲ以被仰渡候事

九月

細田小兵衛

覚

書面之趣難相成候事

鈴木宇右衛門承之

(朱書)
「百六拾五」

子八月七日達書伊賀守殿より茂右衛門江被遣

新見伊賀守 殿

深谷十郎左衛門殿

(日向丸)
曲淵甲斐守

各様元御支配川合又市倅彦八儀、部屋住より御裏御門番同心相
勤罷在候処、去亥年閏六月中父又市致病死、其節父子同高二付
跡式之儀者不申上候段河内守殿より御懸合有之候旨、同月廿五
日御達し有之、其後同八月中先同役室賀山城守取扱ニ而、川合彦
八義御裏御門番同心並之通御足高・御足扶持被下候様願書下野
守殿江致進達、同十月四日勤候内並之通御足高・御足扶持共被
下候段可申渡旨被仰聞承附ニ而返上、同十月十二日右御藏御証文
願致進達候、然ル所今以右御証文出不申候間、表御右筆所江是
迄度々及懸合同所よりも御勘定所江度々懸合有之候由候処、半
扶持之訳ニ而不相済旨書替所ニ而申之候由ニ付、猶又御勘定所江
拙者より及掛合候処、川合彦八御足高・御足扶持勤候内並之通
被下候段ハ願濟之通ニ而宜候得共、彦八父又市御目付支配無役ニ
成候節御足高五俵・御足扶持壹人扶持上り本高拾五俵壹人扶持

二成、倅彦八部屋住勤之節御足扶持ニ候処家督之節父子同高之由、御目付衆より申上茂相濟今更取計方も有之間敷候得共、大間違之段御勘定所江御目付衆より書面ニ而断無之候而者、追而右様之儀見合ニも相成候節書替所不行届相成候間、断有之候ハ、其心得ニ而御証文案等取調候様書替奉行江可申談旨答申越候、右之次第ニ付各様より御勘定所江御掛合無之候而者迎も相濟不申、御下知濟より者最早十一ヶ月ニも相成候、甚難洪之義度々御裏門番之頭より申立候間、早々御勘定所江御掛合之上否御下ケ札を以御答有之候様致度、依之及御掛合候、以上

子八月

御書面之趣致承知候、然ル所川合彦八儀部屋住ニ而御裏御門番同心被 召出候節、父本高之通拾五俵壹人扶持被下置勤候内半扶持御足扶持被下置候儀与存候、依之父子同高与相心得跡式願不申上候、夫共父本高より増候而拾五俵壹人半扶持之御切米被下候儀ニ御座候哉、今一応致承知度候

書面下ケ札之趣ヲ以御勘定所江別紙之通及懸合候、彦八部屋住勤之内被下候御切米御扶持方御足扶持ニ候間、父相果候節者跡式被下彦八取来候御宛行者上り候筋ニ付、父子同高ニ而者無之旨下ケ札を以申越候間、何れニも各様より御勘定所江御懸合有之候様存候、依之先頃御差越有之候御証文写三通致返却、此段及御掛合候否下ケ札を以御答有之早々相濟候様致度候、以上

子九月廿九日

曲淵甲斐守

御書面下ケ札江御下ケ札之趣致承知候、且御勘定所江御懸合書下ケ札并同所より之書面共致一覽候、然ル所此度又市倅川合彦八跡式願差出儀者、文化五辰年四月拙者共支配無役村儀庄三郎病死之節、倅西丸切手御門番同心江部屋住ニ而新規被召抱相勤候ニ付、跡式願同月廿八日撰津守殿江差出候処、同年七月三日右願書御下ケ被成、已来右様父子同高二而御譜代場相勤候者跡式願差上ニ不及倅御譜代場相勤罷在、父子同高二而跡式不奉願段御届可致旨、御同人奥御右筆大沢弥三郎を以被仰渡候ニ付、其段同年七月十一日御同人江御届差上相濟申候、前書被仰渡之通相心得罷在候間、此度川合又市儀ニ付拙者共より御勘定所江懸合候筋者無之候

御勘定奉行衆

新見伊賀守
深谷十郎左衛門

御切米

一、拾五俵

御譜代之者

御目付支配無役
川合又市

壹人扶持

御切米

一、拾五俵

壹人半扶持

内半扶持御足扶持

御裏御門番之頭

大久保彦太夫組同心

実子惣領

同 彦八

右又市儀去亥年閏六月十九日病死いたし候処、同人儀元御裏御門番同心相勤候節、倅彦八儀從部屋住御裏御門番同心江被 召出、御切米拾五俵壹人半扶持内半扶持御足扶持ニ而被下置、御譜代之場所相勤候者ニ而父子同高二付、跡式之儀不申上候旨河内守

殿江申上置候処、別紙之通曲淵日向守より懸合書差越、文化五
辰年村儀庄三郎跡式被下候節、撰津守殿被仰渡候趣も有之候ニ
付右例を以未御証文出不申候ニ付、其御方江拙者共より御懸合
有之候様申越候得共、此度も不申上候ニ付書替所江も其節振合
難相成筋ニ候哉致承知度、別紙式通相添此段及御掛合候否御下
ケ札ニ而御申聞有之候様致し度存候、以上

八月

子八月廿二日

中川忠五郎殿
米倉藤兵衛殿

曲淵日向守

御裏御門番同心川合彦八御証文願之儀ニ付、当七月中及御掛合
御答之趣を以御目付江及懸合候処、別紙之通答下ケ札を以申越
候、右彦八部屋住御切米高拾五俵御扶持方老入扶持外御足扶持
半扶持ニ而、都合老入半扶持之高ニ相成候得共、御足扶持を除
キ候得者父子同高ニ相成候間、右之心得ニ而御目付衆より跡目
願申上無之儀与相聞候間、猶書替所御札否早々被申聞候様致度
候、依之御目付より之答下ケ札書面相添此段及御懸合候、以上

子八月廿二日

御書面之趣書替所江相尋候趣別紙之通御座候、尤川合彦八
寛政十二申年十二月御裏御門番同心江被 召出候節之御証
文面一覽仕候処、同人御切米御扶持方御足扶持候内被下
候旨御文言ニ有之候間、彦八部屋住勤之内被下候御切米御

扶持方御足扶持ニ御座候間、父相果候節者父跡式被下彦八
取来御宛行ハ上り候筋ニ付、父子同高ニ而者難相濟儀与奉
存候、依之御目付江之御掛合書返上御答仕候

子九月

中川忠五郎
米倉藤兵衛

御勘定所

御目付支配無役川合又市相果候処、同人倅御裏御門番同心川合
彦八父子同高ニ付、跡目願御目付より不申上御足高・御足扶持
之御証文計御留守居より相願候ニ付、右御証文下書表御右筆所
より書替所江改ニ差越候処、右者父子同高与申筋ニ無之、部屋
住勤ニ而彦八半扶持之御足扶持御座候間、一旦家督御証文出候
上場所高ニ御足高・御足扶持之御証文出候筋ニ付、御足高・御
足扶持計之御証文下書難改旨、書替奉行より表御右筆所江及答
候趣書替所相尋候処、左之通御座候

一、都而父子同高ニ而跡目願不申上儀者従部屋住御番入等之節、父本
高三百俵之者倅茂三百俵ニ而被 召出、其後父相果候節父子同高
ニ付跡目願不申上、父取来り御切米上り候段廻し御証文ニ出相濟
申候、仮令より父本高百俵其御足高ニ而相勤候者之倅被 召出
候節者、父本高之通被下勤候内其場所並之通御足高被下旨被仰
渡候者父子同高之様ニ者御座候得共、父相果候節者別段父跡式被
下家督御証文出候筋ニ有之、此度彦八儀御足扶持有之候得者前書
見合家督御証文出候筋ニ有之、其上輕キ者之倅外場所相勤候者者、
其場所ニ寄其場所ニ而高勤候内被下候儀も有之、父本高之通被下

候与申被仰渡無之故、御証文面ニも其訳無之、右ニ付父子同高
与申筋ニ無之、一旦家督御証文出不申候而者父本高之通被下候
廉無之候ニ付、家督御証文出候上御足高有之候場所者別段御足
高之御証文出候筋ニ御座候、依之御足高・御足扶持計之御証文
下書難改旨申聞候、尤右之趣者文化五辰年村儀庄三郎節之例ニ
見合候儀与相見候得共、右者其節ニ限り相何取計候儀ニ御座候、
併此度彦八儀も御足高・御足扶持之御証文被下候旨被仰渡茂相
濟候上之儀ニ付、此度ニ限り御足高・御足扶持計之御証文出相
濟候様取計可申候得共、向後見合ニ難相成候間、以後之例ニ者
致間數旨御目付方より申聞候ハ、此度之御証文下書表御右筆
所江改差出候様書替奉行江可申談候

一、前書同様之儀ニ付文化五辰年十二月御留守居番同心今井田金三
郎父午左衛門病死之処、父子同高与申立御足高・御足扶持之御
証文下書表御右筆所より改ニ差越、右者家督御証文出候筋ニ付
其段相伺候処、金三郎高父高之通永々被下候ニ付、此度者御足
高・御足扶持之御証文被下候旨堀田撰津守殿被仰渡、右同時ニ
御目付支配無役庄三郎倅西丸切手御門番同心村儀庄五郎儀同様
之取扱ニ而、其節ニ限り御足高・御足扶持計之御証文出相濟候
儀ニ付、以後之例ニ者難相成旨書替奉行申聞候
右之通御座候

子九月

御勘定所

文政十一子年十一月十四日見置候様十郎左衛門殿被仰聞、御下々
ニ付同役一同一覽之上翌十五日返上

新見伊賀守 殿
深谷十郎左衛門殿

曲淵甲斐守

御裏御門同心川合彦八御証文之儀ニ付、御勘定所再応及懸合候
処、右御証文調方之儀各々方より御挨拶之趣ニ而者、御下知も
相濟候上之儀ニ付段々書替奉行江申談候処、小給之者之儀手間
取難儀ニも可有之候間、先此度者御足高・御足扶持願も相濟候
間、右願濟之趣を以御証文願改可申旨書替奉行申聞候間、以来
之儀者別段伺候積之由御勘定所より答有之候、此段表御右筆組
頭江も申達置候、以上

子十一月

(朱書)
「百六拾六」

子六月四日月番玄久を以差出ス、尤曾祖母引受人表御膳所小間遣
伊庭万五郎より書面を以病死之旨届出

右例

文政九戌年六月四日、鈴木半十郎組元御掃除之者飯田平左衛
門娘まつ片付候迄被下候文政二卯年十二月御扶助米、戌九月
廿九日片付候ニ付御扶助米上り候事

元御中間三浦伊之吉曾祖母 月番 新見伊賀守
御扶助米上り候儀申上候書付 深谷十郎左衛門

覚

鈴木半十郎組
元御中間
三浦伊之吉曾祖母

御扶助米三人扶持

い く

戌六月

右伊之吉儀文化六巳年三月出奔仕家断絶ニ付、曾祖父源助・曾祖母いく江御扶助米奉願候処、同年十一月曾祖父・曾祖母兩人江一生之内御扶助米三人扶持被下置候、其後源助儀文化八未年十月十九日病死仕候節、曾祖母壱人江之御扶助米高只今迄之通三人扶持被下置候旨、同月廿七日被仰渡引続頂戴仕罷在候、右曾祖母いく儀去月晦日病死仕候間、御扶助米上り候儀御勘定所江被仰渡可被下候、以上

子六月

御中間頭
鈴木宇右衛門

文政九戌年六月四日御扶助米上り御断三通、御月番羽太左京殿江差出ス

元御掃除之者飯田平左衛門娘
御扶助米上り之儀申上候書付

月番 羽太左京
本目帯刀

覚

元鈴木半十郎組
御掃除之者
飯田平左衛門
同人娘 まつ

御扶助米式人扶持

右平左衛門儀文化十四丑年九月御吟味之儀有之、揚屋江被遣候処於揚屋病死仕家断絶仕候ニ付、御扶助米奉願候処文政二卯年十二月、娘まつ江片付候迄御扶助米式人扶持被下置候処、まつ儀当五月廿九日片付候ニ付、御扶助米上り之儀御勘定所江被仰渡可被下候、以上

(朱書)
「百六拾七」

子八月廿五日前田又三郎より御使組頭高谷円次郎を以差越候ニ付、承付同人を以返却

御中間頭江

西丸奥御座敷向其外取合御修復ニ付、御風呂屋口脇江会所小屋被建置、御用中日々元火御台所前土戸御門番所より請取度旨、引払之節火之番立合火鎮預り置役人引払、已後夜中共心附万一非常等有之節者、御徒目付当番所江相届ケ取計候様いたし度段、御作事奉行申聞候間番人江可申渡置候事

八月

山岡五郎作

(朱書)
「百六拾八」

子八月懸合書面甚四郎殿被遣候而小幡万兵衛差越候間、五役承付御徒押江相廻ス

御目付衆

御納戸頭

御書付渡并御附札ニ而被下候金銀御渡方之儀各様より御懸合之節、右御書付被遣候得者取扱候支配向之者名前下ケ札ニ認致返却候間、受取之者右御書付持參致候様致度存候、依之此段及御掛合候

子八月

御納戸頭

下ケ札

書面之趣致承知候

(朱書)
「百六拾九」
文化十五寅年

御目付衆

古川山城守

無役

田辺久左衛門妹

御勘定

木戸小三郎江

御支配無役田辺久左衛門妹御勘定木戸小三郎江縁組致度旨相願申候、久左衛門より茂願出相違も無之、御願書御進達有之候ハ、拙者共方ニ而も同日願書可致進達候間御進達日限之儀御申聞有之候様、拙者共進達書下書差進申候御返シニ不及候、且御願書御進達被成候ハ、御進達以前為下書御見せ有之候様致し度候

寅四月

下ケ札

書面之趣田辺久左衛門より茂同様相願候相違無御座候、且此方ニ而者前々より進達不仕候

四月

無役世話役
山崎吉五郎

(朱書)
「百七拾」

文政十二丑年正月廿三日廻状面より写留置候事

来ル廿四日増上寺 惣 御靈屋江 御參詣之節 天光院殿

御装束所江被為 入、夫より 惣御靈屋江被為 成 御參詣相濟有章院様 二天門後仮御装束所江被為 入候節、仮御装束所前御供建・開場、二天門内外御供建場 御目見場所共別紙絵図面之通

一、御成掛 天光院殿仮御装束所江被為 入候者 御參詣相濟候迄ハ前々方丈構江入置候、御途中御供之分雲晴院江入置候事

但御徒目付・御小人目付差引可致候事

一、御老中方・若年寄衆・御側衆 御靈屋御先江御越之節仮御装束所御門より

有章院様

惇信院様 二天門通御同道被成御越候事

但御太刀者不被成御帶之事

一、行列之面々前々月界院江相揃候得共、同院方丈仮住居ニ相成候間良源院江相揃候事

一、切通し御先手勤番之儀定例之場所方丈構込ニ相成、別紙絵図面之通相成候事

一、山門囲込之場所御荒置渡之儀別紙絵図面之通

一、参着之者良源院江相揃候事

但御中間頭・御小人頭江可申渡、尤諏訪部紋次郎江者相達ス
一、台徳院様 御靈屋 御參詣之節 御目見場所勤番御固メ其外之儀者定例之通

(朱書)
正月「認月本之儘」

御参詣之節之通可相心得候事

但其外之儀者去子年六月之通り

十月〔同断〕
(朱書)

御参詣之節者申達候通り可相心得候事

正月

新見伊賀守

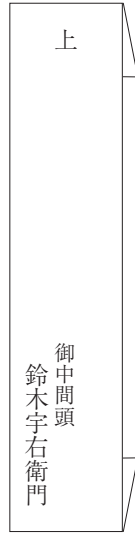
ここに挿入図三図あり(巻末参照)

〔百七拾壹〕
(朱書)

用紙程村半切

上包美濃紙

折掛



覚

鈴木宇右衛門組御中間

橋本恵次郎養方弟

橋本源之丞

子拾六歳

右源之丞儀一躰病身ニ而家督相統難為仕御座候ニ付、恵次郎養父
橋本佐次郎儀同組御中間相勤罷在候砌奉願惣領除仕候、然ル処

佐次郎隠居以後致病死養子恵次郎方ニ罷在候処、病身之上常々

身持不宜候ニ付親類共打寄度々異見仕候得共相用不申、近頃者

別而不行跡ニ相成末々難見届奉存候間、此度右源之丞追出久離

御帳ニ附申度旨母并恵次郎且親類共一同相願申候ニ付差出申

候、以上

文政十一年十一月

御中間頭

鈴木宇右衛門

無印

筒井伊賀守様

右宅通月番町奉行筒井伊賀守御役宅江恵次郎自分羽織袴着用、組
頭定藏同服ニ而同道いたし差出候処、左之通書替相渡候ニ付非番
榊原主計頭御役宅江持参差出候処、一覽之上差戻候ニ付受取持帰
候間右者御帳消之節入用之品ニ付大切ニ致置可申旨恵次郎江申渡
置候事

一、御中間頭鈴木宇右衛門申上候、私組橋本恵次郎養方弟同苗源之
丞与申拾六歳ニ罷成候者兄手前ニ差置候処、常々身持不宜候ニ
付度々異見差加候得共、相用不申末々難見届者ニ付、此度追出
し右源之丞母并恵次郎始親類共一同久離仕候、為後日申上候由
右宇右衛門より書付を以右恵次郎并組頭佐藤定藏申来候

〔百七拾貳〕
(朱書)

百七十四番、百七十五番可見合

御請書

本所中之郷清雄寺日明儀作事之儀ニ付不埒之取計いたし候一件、
為引合被召出再応御吟味之上私儀本所中之郷清雄寺門前貸家之
儀御奉行所江願濟無之段者不存候とも、同所如意輪寺門前家主仁

平次任中ニ右地面いん名前ニ而借〔虫損カ〕「仁平次を家主ニいたし家作建遣貸家ニいたし、右店賃仁平次より請取暮し方ニいたし罷在候段、軽々も御扶持被下候身分ニ有之間敷義不届ニ付御扶持召放被 仰付候旨被仰渡奉畏候、仍御請書如件

文政十一子年十一月九日

御目付支配無役
今井勝右衛門

寺社御奉行所

子十一月十日御扣共式通御部屋祐琢を以差出ス

覚

御扶持被 召放

御目付支配無役
今井勝右衛門

右勝右衛門儀昨九日太田撰津守宅江差出候処、書面之通撰津守申渡候段、差添無役用役之者諸岡紋次郎相届申候、依之申上候、以上

十一月十日

御中間頭
無役世話役

右ニ付御中間頭世話役之内差扣何等出し不申哉之段宗ニ申聞候間、無役之事ニ付而者御中間頭者差出不申旨答候処、又屋敷上り家作家代之儀如何与申来

(朱書)
「百七拾三」

御目付衆

内山七兵衛

拙者元組岩下惣助儀御扶持被 召放及家断絶候ニ付、同人妹式人御支配 御本丸御目付方並木佐太郎由緒有之ニ付、同人方江

引取養育致候処小高小給者ニ而、末々養育行届兼候間御扶助米之儀相願候、御存寄も無之候ハ、近日増山河内守殿江進達可致存候、依之及御掛合申候、以上

(朱書)
「文政十一子」十二月朔日

書面岩下惣助義御扶持被 召放候ニ付、御中間並木佐太郎由緒有之候間、右惣助并妹式人引取養育仕候、然ル処小給之者ニ而難儀仕候ニ付御扶助米之儀相願候旨佐太郎申聞候

十二月二日

御中間頭
古沢茂右衛門

右下ケ札御部屋閑齋取調差越候得共、先例も無之儀ニ付左之通下ケ札認直し、同月五日口上添善丘を以差出候処、矢張先之方宜敷旨申聞、其後御沙汰無之此下ケ札不用相成候得共為見合留置

書面岩下惣助義御扶持被 召放候ニ付、御中間並木佐太郎由緒も有之候間、右惣助并妹式人引取養育仕候処小給之者ニ而難儀仕候ニ付御扶助米之儀相願候旨佐太郎申聞候、然ル処御中間・御小人・御駕籠之者・黒鞆之者・御掃除之者右五役之内御扶持被 召放候者之厄介養育のため御扶助米相願候先例相見え不申候

十二月五日

御中間頭
古沢茂右衛門

(朱書)
「百七拾四 百七拾式、百七十五可見合」

宝曆五亥年十一月三日御用日記之内書抜

一、九平太・幸内・源藏・甚右衛門右拝領屋敷上り町屋敷ニ有之間、依田和泉守殿江相渡候様町奉行衆より御目付衆江御断之書付、下野守殿御渡被成候ニ付奉返上仕候

右之趣ニ付此方より屋敷差上候書付出し不申候

(朱書) 〔百七拾五 百七拾貳番可見合〕

覚

拝領屋敷

本所吉田町

元御支配無役

今井勝右衛門

右勝右衛門拝領町屋敷、昨十五日町奉行筒井伊賀守組与力蜂屋新五郎・榊原主計頭組与力島半助江引渡候段、立会無役用役之者岡田利三郎・高野武左衛門相届申候、依之申上候、以上

(朱書) 〔文政十一子〕十一月十六日

無役世話役
柳田勝太郎

(朱書) 〔百七拾六〕

文政十一子十一月廿五日豊後守殿善丘を以御下ケニ付下ケ札いたし、宗甫を以返上

御目付中

林 右近
勝田弥十郎

拙者共同心過人高橋作左衛門当分手附出役吉川克藏儀御尋之儀有之、右御尋中御預ケ相成支配之者宅番申付置候処、此節臨時御用も有之御用多ニ而人数不足ニ付差支候間、克藏親類西丸御広敷添番篠崎伝兵衛江御預ケ替之儀申上候処、右伝兵衛彦人ニ而者手薄ニ付、是迄之通居置宅番者伝兵衛申合相勤候様肥後守殿被仰

渡候、伝兵衛彦人差加候而も格別人数之操合ニも相成兼候ニ付、克藏由緒之者も組合宅番相勤候様致度旨猶又申上候処、御小人頭兼松弥助・御鉄炮方田付四郎兵衛組同心稲田平三郎儀由緒之者ニ付組入宅番いたし候様可申談旨河内守殿被仰渡候間、右弥助江宅番罷出候様被仰渡可被下候、尤日割等之儀者支配同心・世話役共より当人ニ委細申談候積御座候、以上

十一月廿四日

書面兼松弥助宅番之儀、組も有之候間御小人頭ニ而者是迄宅番罷出候儀無御座候

十一月

御小人頭

(朱書) 〔百七拾七〕

文化九申年正月十三日

一、御本丸江 御入有之御供 御本丸ニ罷在 還御之節、西桔橋江相廻り候御口上を以桔橋江御供相廻り候旨 御本丸江被仰遣候刻是迄御小人目付差遣候得共御用多ニ付、以来野方御使ニ而相勤候様小菅猪右衛門殿被仰渡候旨、御徒目付野宮市郎右衛門より達之旨御使組頭三橋銀三郎相達候、尤山里より吹上御庭江被為 成候節之御供廻りも同様相心得候様同人相達候事

(朱書) 〔百七拾八〕

文政十二丑年三月十一日勝次郎殿御下ケ之旨ニ而当番所組頭速見左太夫より差越承付返却

奉願候通被仰渡奉畏候

三月十一日 村松四兵衛

御口之者御入人之者痛所ニ付元場所江 村松四兵衛
婦番之儀奉願候書付

覚

村松四兵衛支配

御口之者

高拾五俵壹人半扶持

岡田長吉

丑歳四拾壹

内五俵 役切米

右之者元御中間頭末次佐吉組相勤罷在候処、文化十三年四月
私支配御口之者江御入人被 仰付相勤罷在候処、此度痛所出来
御馬取扱仕兼、殊ニ御用多之御場所取統難相勤候ニ付元場所御
中間江婦番奉願候旨吟味仕候処、相違無御座候ニ付願之通婦番
被 仰付被下置候様奉願候、以上

二月

村松四兵衛

右高之儀内五俵役切米与有之候而者元高拾俵之様ニ而、御中間ニ
者不都合ニ付御部屋を以承り候処、勝次郎殿より四兵衛江御懸合
有之候処、外五俵を内与認全内之字書損之由挨拶有之候趣御部屋
申聞候事

(朱書)
「百七拾九」

文政十二丑年七月御右筆より問合

文化元子年十二月

覚

御下男八十郎実子惣領与吉從部屋住黒楯之者江新規被 召抱相

勤候処、病氣ニ付願之通御暇被下候旨御目付申渡候

同五辰年七月

一、小遣之者勇助実子惣領安五郎從部屋住黒楯之者江新規被 召抱
相勤居候処、病氣ニ付御暇被下候旨御目付申渡候

同十三年十一月

一、添番小永井惣太夫実子惣領徳太郎從部屋住御中間江御抱入被仰
付相勤居候処、病氣ニ付御暇被下旨御目付申渡候
右何れも願書御差図振之事

下ケ札

文化元子年十二月三日

御書面与吉儀病氣ニ付黒楯之者頭笠原五太夫御暇
申渡、御切米御扶持方上り候儀御勘定所江御断石
谷周防守差出候書留御座候、尤御暇申渡候儀者黒
楯之者頭手切ニ而申渡候

八月

黒楯之者頭
近藤鯉左衛門

文化五辰年七月四日

御書面安太郎儀病氣ニ付黒楯之者頭竹内孫市御暇
申渡、御切米御扶持方上り候儀御勘定所江御断初
鹿野伝右衛門江差出候書留御座候、尤御暇申渡候
儀者黒楯之者頭手切ニ而申渡候

八月

黒楯之者頭
大林弥一兵衛

〔朱書〕
「百八十の上」

文政六年

御書面徳太郎儀父惣太夫御中間相勤居候節御中間江被召抱、其後御葉園織殿出役仕夫より御中間江掃番仕相勤居候処病氣ニ付、文化十三年十月廿六日御暇御中間頭神谷兵太夫申渡、右明キ御切米御扶持方を以同組御中間俸共之内御抱入奉伺申渡候、御暇申渡候儀者御中間頭手限ニ而申渡候
御中間頭
鈴木宇右衛門
八月

御中間忝人御切米御扶持方
上り候ニ付御勘定所江御断
覚

一、拾貳俵

忝人扶持

右亀三郎儀享和三戌年十一月新規被抱入貳拾忝人之内之者ニ御座候処、当月十一日父家督被下置候ニ付御切米御扶持方上り候間御勘定所江御断被下置候様仕度奉存候、以上
御中間頭
山崎又兵衛
未十二月

○
御書面亀三郎儀享和三戌年十一月新規御抱入被 仰
付候者にて父跡目成歟、又者其身病氣ニ付御奉公相勤
かたき節八御切米御扶持方差上候様被仰渡候者ニ御

座候

享和三戌年五月
御中間忝人御切米御扶持方
上り候ニ付御勘定所江御断
月番
石川友一左衛門組
御中間
吉田市三郎△
一、拾貳俵
忝人扶持

右市三郎儀寛政九巳年十月新規御抱入貳拾忝人之内之者ニ御座候処、病氣ニ付御奉公相勤り不申候ニ付御暇申渡候、依之御切米御扶持方上り申候間御勘定所江御断被下置候様仕度奉存候、以上

戊五月

御中間頭
三名

△
書面市三郎儀寛政九巳年十月新規御抱入被 仰
付候者ニ而父跡目成候歟、又者其身病氣ニ付御
奉公難相勤者御切米御扶持方差上候様被仰渡候
者ニ御座候

〔朱書〕
「百八拾の下」

文政十二年十一月廿四日重兵衛儀於筒井伊賀守御役宅御吟味中揚屋江被遣候ニ付、右親類共同月廿五日番遠慮被仰渡候事

御目付衆

筒井伊賀守

山崎又兵衛組御中間
御旗指之者
土戸重兵衛

丑十一月

鈴木宇右衛門
山崎又兵衛

右相尋候儀有之候間同道人差添、明廿四日四ツ時拙者御役所江
御差出可被成候

十一月廿三日

文政十二丑年十一月廿五日御扣共式通御当番勝次郎殿江差出候
処、後刻御附札を以肥後守殿被仰渡候段、帶刀殿立合勝次郎殿被
申渡書面鱒付返上

御中間押込伺

曲淵勝次郎

覚

鈴木宇右衛門組

山崎又兵衛組御中間

御中間

土戸重兵衛甥

川目熊四郎

同人組

同断

同人従弟

岩堀本左衛門

山崎又兵衛組

同断

同人伯父

土戸五郎右衛門

同人組

同断

同人甥

川目平五郎

同人組

同断

同人従弟

土戸五郎吉

右重兵衛儀昨廿四日於筒井伊賀守御役宅吟味中揚屋江被遣候
間、右親類共押込之儀奉伺候、以上

御中間頭

御附札

熊四郎・五郎右衛門・平五郎者 番遠慮
本左衛門・五郎吉者 御目見遠慮之格可
申渡候

重兵衛揚屋江被遣候二付

番遠慮

重兵衛甥
川目熊四郎

同断

御目見遠慮之格

同人従弟

岩堀本左衛門

同断

番遠慮

同人伯父

土戸五郎右衛門

同断

番遠慮

同人甥

川目平五郎

同断

御目見遠慮之格

同人従弟

土戸五郎吉

右可申渡旨肥後守殿被仰渡候段、帶刀殿立合勝次郎殿被申渡候
事

同丑年十一月廿六日西丸御当番竹川善兵衛殿江差出候処、先例承
り度旨左之通

覚

御目見遠慮之格

山崎又兵衛組御中間
土戸重兵衛従弟
鈴木宇右衛門組御中間
西丸御納戸口番
岩堀本左衛門
同断
同人甥

番遠慮

山崎又兵衛組御中間
西丸野方御使之者
川目平五郎

右者土戸重兵衛儀御尋之儀有之、一昨廿四日吟味中揚屋江被遣候旨筒井伊賀守御役宅ニおゐて申渡候間、兩人共押込之儀相伺候処、書面之通肥後守殿被仰渡候段本目帶刀殿立合曲淵勝次郎殿被申渡候、依之申上候、以上

丑十一月

御中間頭
鈴木宇右衛門
山崎又兵衛

覚

松崎嘉藤太組御中間
清助倅
西丸御中間目付
五十嵐清吉

右者享和三亥年十一月父清助押込被 仰付候節倅清吉身分
御本丸勤之者与一同伺差出候処、書面之通立花出雲守殿被仰渡候段西丸松浦大膳殿江申上置候、以上
丑十一月 御中間頭

(朱書)
「百八拾壹」

文政十二丑年十一月十三日肥後守殿御尋ニ付、勝次郎殿又七郎を以被遣候ニ付御書面江添四枚一同之分又七郎江遣候

近藤鯉左衛門
鈴木宇右衛門 承 之
兼松 弥助

一、御小人・御中間・黒鍬之者・御掃除之者・弟・次男等厄介より新規御抱入之者跡目者不相立病氣等ニ候得者、御暇相成手前抱難相成筈ニ候処、近來厄介等有之候得者身寄より其節限御抱入ニ相成候元濟之事

御別紙御書面之趣取調候処、御中間江新規御抱入之儀別段元濟与申儀者無御座候得共、享和三亥年十一月御中間明跡江式拾四人御抱入被 仰付候内式拾式人者倅共ニ付、父跡目又者其身病死或者病氣等ニ而御奉公難相勤節者御切米御扶持方差上候様被仰渡候ニ付、跡抱ハ不申上御宛行差上来り候処、式人者弟・二男ニ付病死又者病氣等ニ而御奉公難相勤節者御切米御扶持方差上候様被仰渡、尤厄介等有之実々取統難義之者相糺、又新規御抱入之義奉伺候様立花出雲守殿被仰渡候、二付、
厄介等有之者其者之身寄を以新規御抱入相伺被 仰付「来候、其後弟・二男・三男等ニ而新規御抱入被 仰付候」者も右之振合を以相伺来候、且前々より手前抱者不仕候、以上
十一月 御中間頭

(朱書)
「百八拾貳」

文政十三寅年正月十八日当番所小幡万兵衛相尋候者、左之御書付此方ニ留有之哉之旨申聞候
寛政四子年十二月廿三日

御鷹匠頭江

御鷹匠組頭
水上橋右衛門
同人倅
水上岩之助

右者は迄拝借御長屋焼失二付、雉子橋御用屋敷之内女中養生所
家作取繕拝借被 仰付候、飯田町御用屋敷之内土蔵有之候二付、
為引料銀七枚被下候間可被申渡候、御勘定奉行・御目付江可被
談候

(朱書)
「御言振」

雉子橋御用屋敷御門番

六人

右寛政四子年七月頃者未組役付二相見候、寛保四亥年六月
頃者役付二者役名相見え不申候

(朱書)
「百八拾三」

文政十三寅年二月

請取申春御借米之事

米合三俵也

但三斗五升入

右御中間拾五俵取小池仁右衛門儀、去冬御切米迄組合一紙受取
候処御吟味之義有之、去十二月廿四日揚屋江被遣候、然ル所厄
介有之候二付御勘定所御添状之通、当春御借米為取続被下候間
当寅春御借米受取申処実正也、仍如件

御中間頭

文政十三寅年二月

古沢茂右衛門
鈴木宇右衛門

山崎又兵衛

野呂弥右衛門殿
今井兵左衛門殿

請取申御扶持方之事

米合四斗四升式合者

但 京升也

右是者御中間忝人半扶持取小池仁右衛門儀、当正月分御扶持方
迄組合一紙受取候処御吟味之儀有之、去十二月廿四日揚屋江被
遣候、然ル所厄介有之候二付御勘定所御添状之通、当二月分御
扶持方より為給扶持被下候間、当寅二月朔日より同三月晦日迄
日数合五十九日分忝人半扶持之積受取申処実正也、仍而如件

文政十三寅年二月

御中間頭

古沢茂右衛門
鈴木宇右衛門
山崎又兵衛

野呂弥右衛門殿
今井兵左衛門殿

(朱書)
「百八拾四」

文政十三寅年閏三月朔日十郎左衛門殿江差出入、同三日相伺候処

至極可然旨ニ而、御目付衆一同御廻し有之御部屋江張出置可申旨
被申聞候二付、翌四日三組御供組頭定藏・藤四郎・仁兵衛呼出し
御書付之趣申渡候事

一、此度騎射 上覽之節御馬攀人之者共揃刻限遅刻仕候二付、以
来之処能々仕法取極可申上旨被仰渡奉恐入候、右二付向後騎射
上覽其外都而攀人御中間出方人数多く罷出候節者、是迄御供
組頭忝人出候程之人数ニ而も組頭忝人差出、又者忝人出来候程之

出方人数之節者三人差出、其余右ニ准し都而増恠人ツ、差出、遅刻無之罷出差引為致候ハ、手繰等も宜行届可申哉ニ奉存候、且蠻人之者共義も向後右出方之節々遅刻致し候者者其時宜ニ寄申付方も有之、品ニ寄候得者御目付衆江申上候義も可有之候間、其旨急度相心得遅刻不仕罷出候様敷敷申渡置候様可仕奉存候、依之此段申上候、以上

寅閏三月

御中間頭

古沢茂右衛門

鈴木宇右衛門

山崎又兵衛

去月廿六日

内府様騎射

上覽之節御馬蠻人之者揃刻限遅

刻ニ付、奥向御差支相成候旨御小納戸頭被申聞候ニ付、相糺

可申旨深谷十郎左衛門殿被仰聞候間、組頭相糺候処可也ニ御

間合候趣申立候ニ付、其趣を以十郎左衛門殿江申上候処、再

応奥向江御掛合有之候得共何れニも遅刻之段申聞候ニ付、押

込伺差出可申右書面を以猶又奥向江掛合可申旨被仰聞候ニ

付、遅刻之者相糺押込伺可差出処、定藏・仁兵衛申立候ニ者

此度之義者私共兩人計不調法之趣を以御伺被下候様仕度段申

聞候間、兩人之者押込伺并拙者共より御宥免之願書添差出、

兩人之者慎ニ申渡置候処先ツ此度者格別之御勘弁を以御聞濟

被成下候、且是迄逆も 上覽事其外都而之出方も遅刻不揃

之由、是又頭取より申聞候義も有之候間、向後之処仕法相立

書面を以申聞候様十郎左衛門殿被仰聞候間、別紙之通り申上

候ニ付、此後不勤等之御沙汰有之候而者拙者共より御宥免申

立候儀も難致候間、以來都而之出方遅刻不揃等無之様厚く相

心得可被勤候

閏三月

〔朱書〕
「百八拾五」

寅二月廿二日御扣共三通御当番勝次郎殿江委細口上添差出候処、

此書面者差出不申積相心得旨ニ而書面御差戻シ有之候、右様子者

屋根煙立候迄ニ而町内之者計ニ而鎮し、火事場役人も罷出不申、

此節者敷敷被仰渡有之候事故名主より町方へ届候由、尤怪火之様

子ニ付右之火種之品持参町奉行所江届候由、依之此方も何書差出

候事

御中間押込伺

覚

拝領大縄町屋敷

本郷菊坂台町住居仕罷在候

鈴木宇右衛門組

御中間

木村平兵衛

右平兵衛地面家主久兵衛店吉五郎居宅後口屋根軒先より、昨廿

一日曉九ツ時過頃煙立候迄ニ而町内之者打寄早速相鎮申候、勿

論類焼之者も無御座候得共平兵衛儀押込置可申哉奉伺候、以上

寅二月廿二日

御中間頭

鈴木宇右衛門

〔朱書〕
「百八拾六」

文政十三寅年三月廿六日

兼松弥助組

御小人目付

持田登平

右湯治願候処最初近処江罷越又々此度木之崎江罷越度段、願方之

儀者尤之事ニ候得共、御用多之勤場所ニ而如何ニ有之候間評儀之

上湯治願不相成候、勿論此者ニ限り不相成与申訳ニ者無之、以後余人連も湯治願難相成与申ニも無之候、病躰ニ寄是非不罷越候而者難相成処見極候ハ、格別手軽く相心得願候而者不宜候、此者儀も病氣之事ニ付願候ハ、御用多御役者難相勤候義ニ付、御役御免願候上ニ而願候様ニも致候敷之訳ニ而候、右之通弥助江申通候様戸塚豊後守殿立合、深谷十郎左衛門殿宇右衛門江被申渡候、弥助より出候湯治願書付御戻し被成候、即刻 西九より伝兵衛引來候ニ付相達ス
右之趣者同役江も文通ニ而申達置候事

(朱書)
「百八拾七」

文政十三寅年閏三月十七日

一、日光参詣願者御月番江書付差出、出立帰府之届者御当番江差出候処、日光之参詣願ニ限り、出立帰府并願共御月番取扱有之候間、一同能々心得呉候様宗ニを以被申聞候事

寅閏三月十七日

(朱書)
「百八拾八 百六十二、百九十三組合」

文政十三寅年八月別紙御徒方組頭より掛合之趣、御徒目付組頭より御使組頭江相渡候ニ付、野方御使・在方出役之者江も申渡置候事

一、御目付方・御徒方之儀者 御成先 御名代其外出役等之節共、定御出会之場所ニ御座候間、御出会勤之節若御徒方手違等之儀御

(朱書)
「百八拾九」

寅四月廿八日内匠殿被遣

御徒目付組頭江

座候ハ、御目付衆より不被仰出各様より拙者共江御談御座候様仕度、若又御目付方江御掛合仕候儀御座候節者、各様迄拙者共より御内談可仕、左候得者書面等之御掛合与違え事柄ニ寄穩便ニも可相濟儀ニ付、以来御徒目付衆者勿論其外在方出勤之衆中迄も、右之趣被相心得候様可致段、広瀬龜三郎申聞候間一同咄合承知之旨致挨拶候間、前書之通御心得可被成候事

寅八月

増上寺 御装束所方丈向御普請出来 御装束所御門前此度場広
ニ相成候ニ付、以来 御参詣之節 御成掛ケ 御装束所江被為
成、夫より二天門通 御参詣相濟御内道通り 御装束所江被
為 入候節并 還御之節共、御供建場・開場 御目見場所勤
番御固メ等別紙絵図面之通ニ而候
一、御成掛 御装束所江不被為 入二天門通 御参詣被遊候ハ、
方丈構外江罷出 御目見仕候面々別紙絵図面之通ニ而候
一、二天門外御供建場・開場之儀者前々之通ニ候
一、方丈向御普請出来玄関門・庫裏門・其外門番所等少々ツ、模様
替之場所所有之候得共、御老中方・若年寄衆・御側衆内外御供入
置候場所并御先勤之面々揃所、右供廻り差置候場所其外共前々
之振合ニ候

一、正月廿四日惣 御靈屋江 御参詣之節 御装束所御門前御供建

場・開場 御目見場所等之儀者追而伺之通可申達候
右之通伺相濟候ニ付申達候

四月

曾根内匠

ここに挿入図あり(卷末参照)

明和七寅年十月

御中間倅共

拾人

右御切米拾貳俵無扶持ニ而御抱入被 仰付候

但此節茂宝曆十三年之通其度々御切米御扶持方差上候様被仰渡候、然ル処並高より御減被下候而者御奉公難相成、前格之通拾五俵壹人扶持ニ被成下候様再三奉願候処、左様ニも候ハ、是迄並高俅共明キ候節御奉公可相勤、相応之者倅共無之節者右跡江御抱替可奉願旨被仰渡候

寛政九巳年十月

御中間倅共

貳拾人

右御切米拾貳俵壹人扶持ニ而御抱入被 仰付候

享和二戌年十月

御中間倅共

貳拾貳人

右御切米拾貳俵壹人扶持ニ而御抱入被 仰付候

御中間

弟 壹人
次男 壹人

右御切米拾五俵壹人扶持ニ而御抱入被 仰付候

右以来部屋住倅共御抱入被 仰付候儀無御座候、弟・次男・三男・甥・従弟其外厄介ニ而御抱入相願候処、拾五俵壹人扶持ニ而

(朱書)
「百九拾」

文政十三寅年四月廿三日

一、西丸勤御中間・御小人より他場所御役出願差出候節、以来上封いたし上之字認メ差出候様、主馬殿伝兵衛江被仰聞候事

(朱書)
「百九拾壹」

宝曆十三未年五月

御中間倅共

拾貳人

右御切米拾五俵壹人扶持御抱入被 仰付候

但此度倅共父之跡目ニ成歟、又者病死・病氣ニ而御奉公難相勤節者、其度々御切米御扶持方差上候様御書付を以被仰渡候

御抱入被 仰付候

右之通御座候、以上

寅五月

御中間頭

〔朱書〕
〔百九拾貳〕

文政十三寅年五月廿日頃豊後守殿江差出置候処同九月八日御下ケ

一向宗

寺院之女子

同断

同断之次男・三男

右統者無御座候得共、御家人江縁組并養子等ニ仕候儀者、可相成筋合ニ可有御座候哉

書面之通者難相成事ニ存候

御家人之女子

同断之次男・三男

右一向宗之寺院江嫁し遣候儀并養子之次女ニ差遣、同宗之跡住職等仕候儀者可相成筋合ニ可有御座候哉、右之趣例も無御座候得共、妻帯不苦宗躰之義ニも御座候間、願候者御座候節者組住来之続ニ取計、願之通申渡候様可仕哉、此段御内慮奉候、以上

寅五月

御中間頭

鈴木宇右衛門

書面之通者筋合ニ寄可相濟事ニ存候

〔朱書〕
〔百九拾三 百六十二、百八十八組合〕

文政十三寅年二月十二日

金森甚四郎殿

御徒頭

御鷹野 御成之節御場内人留等之儀、以前者御代官手代致出役候処、以来各方御支配向出役被仰渡候段、寛政四子年十一月御達も御座候処、近来遠 御成御場内人留又者繩張等之儀ニ付、拙者共組之者と彼是申争或者宿役人・村役人共江差凶之儀区々ニ而迷惑いたし候趣、其外御書面を以御達御座候趣得与評儀いたし、已来右躰之儀無之様組之者共江も可申渡存候、然ル所右御場内留方繩張等之場所、何れより何れ迄其御支配向持場与申儀、凡相定り不申候而者兼而組之者共江心得申達兼候、先年御代官手代致出役候場所者各方御支配持ニ相成候儀与相心得可然哉、左候得者寛政四子年久世丹後守より手代出役為致候場所取調差越候、別紙之通御座候、已来右之通相心得可申哉、今一応及御掛合候

二月十二日

御徒頭

西丸

御徒頭

御徒頭衆

久世丹後守

御鷹野御用筋之儀是迄御勘定所ニ而引請取計来り候処、拙者義関東郡代兼役被 仰付候ニ付、右御用筋拙者引受取計可申旨御内々御沙汰之趣も有之候ニ付、已来主法品々取調申上候、右ニ付 御成御当日御場内人留之儀、只今まで御代官手代出役いたし取締方申付候得共、右者一躰不輕御取締筋ニ有之候間、以後右人留之儀御手前様方御引受、御徒方出役いたし候方御取締筋

猶又御手厚ニ相成可然存候ニ付其段も申上候、若右之通被 仰
 付候而も御手御差支之筋も有之間敷哉、尤 御成忝度忝人ニ付
 銀式匁ツ、之当テを以御手当被下候積り、其外勤方之儀者御取
 締專一之進退ニ付、格別手込候筋ニも無之勿論弥右之通被 仰
 付候儀ニも至り候ハ、猶出役勤方等者得与及御掛合、出役之
 御徒方江も当分之内者其度々支配向之者より申談合、且村方江
 も御徒方差図を請相勤候様、兼而申触置候積りニ有之候、其御
 手御差支之筋も無之候者弥右之趣を以取調候間否御申聞有之候
 様ニ致度候、依之御内々及御掛合候

御成之節人留為御用出役之儀、御取締申触候廻状等御場所ニ寄
 振合違ニ候得者、兼而御用透之節認メ置候而出役いたし持参近
 辺村名認メ入、廻状差出候村々より請書取之村役人江取締申付、
 勿論出役之者請持之場所度々見廻り火之元其外取締仕 還御相
 濟候御沙汰承り候上場所引取申候

子三月二日駒場原雉子追鳥狩 御成ニ付人留

- 一、下渋谷村 忝 人
- 一、野崎組 忝 人
- 一、上豊沢村 忝 人
- 一、池尻村 忝 人
- 一、代々木村 忝 人
- ノ四 人

子三月十三日王子筋江 御成ニ付人留

- 一、駒込町 忝 人
- 一、池袋村 忝 人
- 一、谷中片町 忝 人
- 一、下板橋宿 忝 人
- 一、川口町 忝 人
- 一、滝野川 忝 人
- 一、尾久 忝 人
- 一、豊島 渡場 忝 人
- 一、金沢町 忝 人
- ノ八 人

- 一、藤堂和泉守・松平甲斐守屋敷近辺出人 忝 人
- 一、滝野川弁天境内出人 忝 人
- 一、同居村辺出人 三 人

子四月二日 須崎筋江 御成ニ付人留

- 一、金杉町 忝 人
- 一、亀戸柳島 忝 人
- 一、千住 忝 人
- 一、隅田村 忝 人
- 一、小塚原 忝 人
- 一、新宿 忝 人
- 一、新島越 忝 人
- 一、奥戸 忝 人
- 一、下平井 忝 人
- 一、綾瀬橋 忝 人

一、下谷新町
三ノ輪町

ノ拾 人

壹 人

一、綾瀬橋より千住大橋迄出人

一、汐入村より千住大橋迄出人

一、綾瀬・牛田大土手通り千住大橋迄出人

子四月十五日雜司ヶ谷筋江 御成ニ付人留

一、荒井村

一、柏木村

一、関口水道町

一、池袋村

一、長崎椎名町

一、大塚町

一、巢鴨町

一、板橋宿

ノ八 人

一、関口水道町辺より改代町辺迄出人

一、雜司ヶ谷椎名町出人

一、巢鴨五軒町出人

一、同庚申塚并折戸道辺出人

子八月二日浜御庭江 御成ニ付人留

一、深川獵師町

拾 人

拾 人

拾 人

壹 人

壹 人

壹 人

壹 人

壹 人

壹 人

壹 人

壹 人

壹 人

壹 人

七 人

弐 人

三 人

四 人

壹 人

一、品川宿火之元締

一、深川海苔干場

一、本所中之郷

ノ四 人

但水添 上覽魚獵等有之候ニ付如斯

陸地 御成浜御庭内計り之節、品川人留壹人差出申候

子十月十三日亀有筋江 御成ニ付人留

一、下平井村

一、源森橋

一、柳島村

一、四ツ木村

一、逆井

一、大島村

一、水戸橋

一、千住宿

一、新宿

ノ九 人

一、源森橋出人当時御先払組より壹人居渡

一、四ツ木村出人

一、綾瀬・牛田大土手より千住大橋迄出人

子十月廿一日上千葉筋江 御成ニ付人留

壹 人

壹 人

壹 人

拾 人

拾 人

壹 人

壹 人

壹 人

壹 人

壹 人

壹 人

壹 人

壹 人

壹 人

壹 人

弐 人

拾 人

一、奥戸渡場 壹人

一、寺島村 壹人

一、保木間村 壹人

一、四ツ木村 壹人

一、新宿 壹人

一、内匠新田 壹人

一、角田村綾瀬橋 壹人

一、須崎村 壹人

一、源森橋 壹人

一、源森橋 壹人

一、源森橋出人右同断

一、四ツ木村出人 貳人

一、隅田村大土手通出人 四人

十一月 大沢惣左衛門

一、浜御庭より陸通被為 成候節総而出人無御座候

浜御庭江大川通 御成之節

深川清住町 相川町 佐賀町 熊井町 大島町 仙台河岸

人足寄場并佃 突出新地 越中島より松平伊豆守屋敷迄

佃町 網干場 入船町 木場町より洲崎弁天砂村小口迄

両国橋下三而水馬 上覽夫より大川通り浜御庭江 御成之節

深川清住町 相川町 佐賀町 熊井町 大島町 仙台河岸

人足寄場 佃島 突出新地 越中島より松平伊豆守屋敷迄

佃町網干場 入船町 木場町より洲崎弁天 砂村小口迄

大川通芝浦式部卿殿屋敷海手 御居船之節

深川清住町 相川町 佐賀町 熊井町 大島町 仙台河岸

人足寄場 松平伊豆守屋敷迄 佃町網干場 佃島 突出新地

入船町 木場町より洲崎弁天 砂村小口迄

芝金杉橋より 田町大木戸迄

三河島筋江 御成、千住宿 御入込之節

深川清住町 佐賀町 相川町 仙台河岸 御船蔵後口

一ツ目辺迄 綾瀬辺 汐入村辺 牛田大土手辺 千住大橋迄

千住大橋向前 三河島観音寺 御膳場固壹組同所 植木屋固

小塚原町 天王前 山谷町 新鳥越町 髪洗橋 日本堤 蓑輪

竜泉寺町前辺 金杉往還 蓑輪宗对馬守屋敷迄

浅草観音裏拾壹軒屋敷入并見廻り 馬道左右 富士前

浅草観音境内

須崎筋 御成 還御豎川通り之節

牛田大土手より 綾瀬橋辺迄 須崎御上り場迄 小梅・請地

秋葉近辺 源森橋 押上拾間川通 柳島村境橋迄

四ツ目辺屋敷入并御徒組屋敷迄 浅草観音境内 汐入村

橋場絵泉寺境内辺并小塚原 日本堤 髪洗橋辺 竜泉寺村

浅草観音裏拾壹軒屋敷入并見廻り 新堀端迄 慶印寺

幸竜寺辺 北馬道 浅草観音裏 富士前 溜之方 坂本裏
山崎町 黒嶽屋敷 今戸辺 興福寺
御膳場固壺組本所御船蔵後辺 中之郷辺

亀有筋江 御成之節

木母寺境内 隅田大土手通 綾瀬・牛田大土手通 千住大橋迄
四ツ木辺 伊東谷 古川端辺 汐入村より 千住大橋迄
源森橋辺 今戸橋辺 本所壺ツ目御船蔵辺 亀有村 恵明寺
御膳場壺組并御膳所近辺 本所中之郷

雑司ヶ谷筋江 御成之節

穴八幡境内 大久保百人町組屋敷 御鷹方組屋敷 御膳場近辺
雑司ヶ谷 畑町 椎名町 目白台近辺 関口水道町 四ツ家町
面影橋辺 護国寺境内 高田馬場固 高田馬場辺 植木屋
鬼子母神境内

王子筋 御成 還御千駄木御鷹部屋 御通拔之節

藤堂和泉守 松平甲斐守 建部内匠頭屋敷近辺 上駒込
下駒込 植木屋 染井花屋 飛鳥山 定茶屋近辺 滝野川弁天
同所居村辺 中里御用屋敷 妙儀坂之方 道灌山辺
平塚明神前 熊野坂辺 西ヶ原植木屋并 田端辺 日暮里
諏訪明神辺高之御見通 千駄木 七面坂迄 三崎植木屋近辺
千駄木御鷹部や

巢鴨通 御道筋之節者

巢鴨松平加賀守・大久保加賀守殿屋敷近辺 巢鴨庚申塚
折戸道 同所植木屋 王子金輪寺 御膳場固壺組

駒場野 御成之節

駒場御用屋敷 御膳所固壺組 渋谷金王江 御入込之節
右近辺屋敷入見廻り共

御鷹野 御成之節御場内其外御目付方・在方出役之者持場与御
徒方持場与入相候場所、右之通出役仕候得共 御成御模様二寄
少々異同御座候儀も可有御座、書面之外二も 御成御場所二寄在
方出役之者持場与御徒方御固所与入相之場所も有之候得共、先
御徒目付衆御達書面 御成御場所之振合之御場内其外屋敷・町
屋辺等、都而御徒方御固所之内在方出役之者持場与入合之場所
大概相認メ入御覧候、尤右之外何方筋 御成二而も此度御目付衆
御達書面在方出役之者場所ケ所御徒方二而兼而相心得罷在 御成
出役仕候節、都而御固場所在方出役之者持場与入合候場所者兩持
場之儀二付在方出役之者より申談、人留繩張等之場所得与打合仕、
若留切場御徒方心得与相違之場所も有之候者、猶又厚く申合御固
便利之方江聊異論ケ間敷儀無之様相心得、在方出役之者 御見
通二無之場所見廻り候節も両持場之儀二付彼是申談候様成儀無
之、双方熟知仕相勤候者御取締も行届自然村役人・宿役人共差
図之儀区々之筋も無之迷惑仕候儀有之間敷与奉存候、乍去 御
成御場所二寄御徒方御人少出役仕候節者懸持之場所も有之、且在
方出役之者も手広二場所出役仕候節者相互二致面会動向打合等

も相成兼候儀も可有御座候、右様之節見計差略仕相勤候者御差支之儀も御座有間敷与奉存候、且又扨後在方出役之者持場所見廻り通行之節御徒方ニ而差留御差支ニ相成候趣、右者一躰扨後留切場内者御用之者ニ而も兼而御目付衆より御断無之者一相相通不申候規定ニ付、差留申候儀与奉存候、尤扨相知れ候場所者扨後者時宜ニ寄見計差略仕相通シ候儀も可相成哉ニ御座候得共、扨相知不申候場所者 御先之御程合も相知兼候ニ付容易ニ難相通儀ニ御座候、乍去差留候而者御目付方御差支ニ相成候儀ニ付、以来在方出役之者持場所見廻り候節、御徒方持場留切之内何方ニ而も無差支相通可申旨御目付衆より兼而御達有之候様相成候得者御役名・姓名承札候上相通可申候、其節若 御先ニ差掛り候儀も御座候ハ、在方出役之者進退等相心得御目障等之儀無之様致差略候儀与奉存候、右之段一同相談仕申上候、以上

閏三月

御徒組頭

西丸

御徒組頭

下ケ札

御書面在方出役之者持場之儀相札候処、別帳相認差出猶又末文之趣申聞候、右之通ニ相成御組ニ西丸共差支之儀も無之候ハ、其通相心得候様可申渡与存候、依之西丸江も御廻し否、猶御下ケ札ニ而御申聞可有之候、且先年郡代より之懸合書面致返却候、在方出役差出候別帳之儀も御一覽相済候ハ、御返却可有之候

三月

金森甚四郎

御書面在方出役之ケ所御別帳之通相心得候様拙者共組々江も申渡置候、御徒方出役之固所組頭共より取調差出候間別帳を以御達勤方打合之儀相互ニ致面会可申談候得共、兩丸御成等ニ而御徒方手廻り不申懸持ニ致シ候場所も有之、面会難成節者見計差略いたし相勤候ハ、差支之儀も有之間敷存候、扨後留切場之内通行之儀者御用之者ニ而も各方より、兼而御達無之分者相通不申規定ニ有之候間已來在方出役之者扨後通行之儀兼而御断有之候様致度、左候得者役名・姓名承札相通可申、乍去御先之御程合難計候得共右之差別無之御断有之候面々相通可申候、尤 御目障等ニ不相成候様被差心得進退被致候儀与存候、則御別帳返却猶又及御掛合候

四月

御徒頭

西丸

御徒頭

御下ケ札并御徒方入合候出役ケ所御別紙御差越致承知候、勤方打合之儀者兩丸 御成等ニ而御徒方手廻り不申面会不相成儀も有之候、在方出役之儀も同様手足り不申欠持致候場所も有之候間、右様之節繩張等可致場所之儀者双方共先江罷越方ニ而、所役人江致差図繩張等為致候様可致候、然ル所右繩張いたし方双方心得区々之儀も有之候節者、跡より罷越候者所役人江申談繩張為仕直候儀も有之候由、右ニ而差支相成候場所之儀者不及申談為相直候儀者勿論ニ候得共、差支無之場所之儀者右致差図候者之名面所役人より承置、跡ニ而申合可然方ニ相直候様致し度旨在方出之者申立候、且留切中

致通行候儀者御断差出候様則御断書面并名面書差進申候、
 其都度ニ者御断不及右名面之内替名又者相替儀有之候節者
 相逢候様可致候間、兼而両丸御組々江も御申渡置有之候様
 存候、且 御目障等ニ不相成様差心得致進退候儀者勿論
 之儀ニ候、此段又々及御答候

四月

金森甚四郎

浜御庭より陸通 御成之節

歩行新宿 北 品川宿 狢師町 二日 市村 海晏寺門前
 南 品川宿 狢師町 五日 市村 海晏寺門前
 長徳寺門前 妙国寺門前 海雲寺門前 浜川町 御林町
 都合拾ヶ所

浜御庭江大川通 御成之節

歩行新宿 北 品川宿 狢師町 二日 市村 海晏寺門前
 南 品川宿 狢師町 五日 市村 海晏寺門前
 品川寺門前 長徳寺門前 妙国寺門前 海雲寺門前 浜川町
 御林町 相川町 熊井町 富吉町 北川町
 諸 町 越中島町 定浚屋敷 築出新地 蛤 町
 大島町 中島町 黒江町 奥川町 佃 町
 三左衛門屋敷 永代寺門前 仲 町 東仲町 三拾三間堂町
 入船町 山本町 平井新田 木場町 吉祥寺門前
 永代新田 石小田新田 砂村新田 青地 南組 清住町
 北組
 伊勢崎町 中川町 今井町 本 永代町 堀川町

小松町 松賀町 拝借屋敷 富田町 一色町
 平野町
 都合五拾式ヶ所

両国橋下ニ而水馬 上覽夫より大川通浜御庭江 御成之節

歩行新田 北 品川宿 五日 市村 狢師町 海晏寺門前
 南 品川宿 二日 市村 狢師町 海晏寺門前
 品川寺門前 長徳寺門前 妙国寺門前 海雲寺門前 浜川町
 御林町 相川町 佐賀町 熊井町 富吉町
 北川町 諸 町 越中島町 定浚屋敷 築出新地
 蛤 町 大島町 中島町 黒江町 佃 町
 三左衛門屋敷 永代寺門前 仲 町 山本町 奥川町
 東仲町 三拾三間堂町 入船町 平井新田 木場町
 吉祥寺門前 永代新田 石小田新田 砂村新田 青地 南組
 清住町 伊勢崎町 平野町 一色町 万年町 忝丁目
 材木町 永堀町 堀川町 富田町 小松町
 拝借屋敷 海辺大工町 常盤町 六間堀町 元 町
 森下町 御船蔵前町 北 南本所町 石原町 中之郷町
 小梅村町共 柳島村町共 押上村 須崎村 寺島新田共
 隅田村 山之宿町 花川戸町 材木町 駒形町
 東 仲 町 並木町 田原町 三間町 諏訪町
 西 仲 町

南馬道町 山川町 聖天町横町共 感応寺門前山川町
 北馬道町 今戸町 橋場町 浅草町 瓦町
 田町 新鳥越町
 山谷町 都合九拾壹ヶ所
 大川通芝浦式部卿殿屋敷海手 御居船之節
 歩行新田 南品川宿 獵師町 二日市村 海晏寺門前
 五日 品川寺門前 長徳寺門前 妙国寺門前 海雲寺門前 浜川町
 御林町 不入斗村 西大森村 北 魏谷村 下高輪村町共
 本
 同台町 芝車町 泉岳寺門前 如来寺門前 田町 老丁目より
 九丁目迄
 伊皿子町 同台町 三田町 老丁目より
 四丁目迄 同台町 老丁目
 三田裏町 北代地町 久保町 同洞町 神宮寺門前
 常教寺門前 竜原寺門前 当光寺門前 泉福寺門前 中道寺門前
 功運寺門前 上高輪宝徳寺門前 式本榎町 広岳院門前
 相福寺門前 覚真寺門前 上行寺門前 承教寺門前 国昌寺門前
 証誠寺門前 知将院門前 保安寺門前 白銀村 同台町 老丁目より
 拾一丁目迄
 芝金杉町 老丁目より 裏町 老丁目より
 五丁目迄 浜町 同洞町
 片町 経覚寺門前 安楽寺門前 西応寺門前
 本芝 老丁目より 入横町 材木町 相川町 佐賀町
 四丁目迄
 熊井町 富吉町 北川町 諸町 越中島町

定浚屋敷 蛤町 築出新地 大島町 中島町
 黒江町 清住町 伊勢崎町 平野町 一色町
 万年町 二丁目 材木町 永堀町 堀川町 富田町
 三丁目
 小松町 拝借屋敷 西 東 永代町 今川町 中川町
 海辺大工町 常盤町 六間堀町 元町 森下町
 御船蔵前町 佃町 三左衛門屋敷 永代寺門前仲町
 山本町 奥川町 東仲町 三拾三間堂町 入船町
 平井新田 木場町 吉祥寺門前 永代新田 石小田新田
 砂村新田 青地 南組
 北組
 都合百拾ヶ所
 三河島筋千住宿 御入込 御成之節
 千住 老丁目より 掃部宿 河原町 橋戸町 柳原村 弥五郎新田
 五丁目迄
 治郎左衛門新田 谷中古門前町 谷中町 七面前町 同片町
 新門前町 中門前町 表門前新茶屋町 九ヶ寺門前 三崎町
 玉林寺門前 善光寺門前 谷中本村 新堀村 田畑村
 根津門前町 同宮永町 王子村 滝野川村 西ヶ原
 中里村 上中里村 上駒込村 豊島村 梶原堀之内村
 上 下 尾久村 町屋村 三河島村 船方村 小塚原村
 中村町 山王門前 通新町 三輪町村共 山之宿町
 花川戸町 聖天町横丁共 瓦町 山川町 感応寺門前山川戸町

田町 南馬道町 材木町 茶屋町 並木町 駒形町 諏訪町
 北 東仲町 田原町 三間町 橋場町 今戸町
 新鳥越町 浅草町 山谷町 上 金杉村町共 坂本村町共
 下 竜泉寺村町共 新吉原町 五拾間道 清住町 佐賀町
 小梅村町共 押上村 柳島村町共 龜戸村町共 菓加宿^(兼)
 瀬崎村 新里村 上 中中谷塚村 須崎村 寺島村新田共
 下 請地村 大畑村 木下村 上 木下川村 葛西川村
 下 小村井村 小菅村 上 千葉村 宝木塚村 砂原村
 北三谷村 伊藤谷村 普賢寺村 蒲原村 隅田村
 善左衛門村 若宮村 堀切村 篠原村 小谷野村
 四ツ木村 渋谷村^(江之) 中原村 新宿町 龜有村
 西青戸村 表青戸村 立石村 淡須村 原村
 梅田村 川端村 内匠新田 花又村 五兵衛新田
 嘉兵衛新田 久右衛門新田 長左衛門新田 辰沼新田
 佐野新田 久左衛門新田 長右衛門新田 大谷田村 六ツ木村
 竹塚村新田共 六月村新田共 保木間村 小右衛門新田
 栗原村新田共 梅田村 島根村 古千谷村 入谷村 舍人村
 谷在家村 皿沼村 伊興村 本木村 高野村 小台村
 宮城村 興野村 西新井村 上 沼田村 鹿浜村新田共
 下

堀之内村

都合百五拾七ヶ所

須崎筋江 御成之節

千住^老丁目より 掃部宿 河原町 橋戸町 本木村
 五丁目迄
 小台村 宮城村 高野村 西新井村 興野村
 上 沼田村 堀之内村 鹿浜村新田共 伊興村 御神領伊興村
 下 竹塚村 六月村 栗原村 島根村 梅田村
 治郎左衛門新田 弥五郎新田 柳原村 小菅村 上 千葉村
 下 宝木塚村 伊藤谷村 五郎兵衛新田 嘉兵衛新田 久右衛門新田
 久左衛門新田 長左衛門新田 辰沼新田 蒲原村 北三谷村
 普賢寺村 龜有村 西青戸村 表青戸村 淡路村
 長右衛門新田 大谷田村 佐野新田 六ツ木村 四ツ木村
 篠原村 渋谷村 中原村 立石村 梅田村
 原村 川端村 上 中平井村 逆井村 東 小松川村
 下 上 小松村 奥戸村 隅田村 奥戸新田 古組 上一色村
 本一色村 奥宮村 善左衛門村 若宮村 堀切村
 小村井村 葛西川村 上 木下川村 大畑村 請地村
 木下村 龜戸村町共 柳島村町共 中之郷町 小梅村町共
 南 北本所町 石原村 深川元町 御舟藏前町 海辺大工町

清住町 佐賀町 六間堀町 森下町 寺島村新田共
 須崎村 小塚原町 中村町 山王門前 通新町
 三ノ輪村町共 三河島村 上尾久村 町屋村 船方村
 新宿町 曲金村 細田村 柴又村 鎌倉新田
 金町村 橋場町 今戸町 山谷町 新鳥越町
 浅草町 竜泉寺村町共 新吉原町 五拾軒道 日本堤
 山之宿町 花川戸町 聖天町横丁共 瓦町 山川町
 田町 感応寺山川町 南馬道町 材木町 茶屋町
 並木町 駒形町 諏訪町 三間町 東仲町
 田原町 都合百弍拾七ヶ所 西町
 亀有筋江 御成之節
 千住宿 志丁目より 掃部宿 河原町 橋戸町 本木村
 五丁目迄
 小台村 宮城村 上沼田村 高野村 西新井村
 梅田村 堀之内村 鹿浜村新田共 小塚原町 中村町
 山王門前 通新町 三ノ輪町 三河島村 町家村
 上尾久村 船方村 梶原堀ノ内村 亀戸村町共 柳島村町共
 下尾久村 押上村 請地 小村井村 葛西川村 上木下川村
 木ノ下村 大畑村 下平井村 逆井村 中之郷村

南本所町 石原町 深川六間堀町 御舟蔵前町 海辺大工町
 北本所町 森下町 清住町 佐賀町 橋場町
 元町 森下町 清住町 佐賀町 橋場町
 今戸町 山谷町 新鳥越町 竜泉寺村町共 浅草町
 新吉原町 五拾軒道 日本堤 坂本村町共 上金杉村町共
 隅田村 善左衛門村 寺島村新田共 若宮村 掘切村
 小谷野村 須崎村 小梅村町共 垢村 古新田
 大瀬村 伊勢野村 大原村 中馬場村 大曾根村
 浮塚村 内匠新田 花又村 小右衛門新田 竹塚新田
 六月新田 保木間新田 栗原新田 五兵衛新田 嘉兵衛新田
 長左衛門新田 久右衛門新田 辰沼新田 久左衛門新田 蒲原村
 北三谷村 普賢寺村 六ツ木村 西青戸村 表青戸村
 淡路村 立石村 中原村 梅田村 亀有村
 四ツ木村 篠原村 洪江村 原村 川端村
 小菅村 下千葉村 宝木塚村 砂原村 柳原村
 弥五郎新田 伊藤谷村 次郎左衛門新田 山之宿町 花川戸町
 聖天町横丁共 山川町 瓦町 田町 感応寺門前山川町
 南馬道町 材木町 茶屋町 並木町 駒形町
 北馬道町 諏訪町 三間町 田原町 西仲町 奥戸村
 同新田 古組 上中平井村 上小松村 本一色村 上一色村
 新組 下中平井村 上小松村 本一色村 上一色村
 奥宮村 新宿町 曲金村 細田村 柴又村

鎌倉新田 金町村 飯塚村 中新田 猿新田
猿ヶ又村 新々田 戸ヶ崎村

都合百四拾八ヶ所

雑司ヶ谷筋江 御成之節

池袋村 中丸村 金井窪村 新田堀ノ内村 雑司ヶ谷村町共

長崎村 葛ヶ谷村 江古田村 下 鷺宮村 片山村

上 沼袋村 中荒井村 荒井村 下高田村 高田四ツ家町

小石川四ツ家町 下板橋宿 前野村 蓮沼村 小豆沢村

志村 上 十条村 赤羽根村 稲付村 上板橋宿

徳丸村 西台村 中台村 下 赤塚村 上 練馬村

早稲田村町共 中里町 中里村町 榎町 弁天町

天神町 原 町 壹丁目より 三丁目迄 関口水道町 同駒井町 同台町

牛込馬場下町 馬場下横町 下戸塚村 若松町 市ヶ谷田町

薬王寺前町 柏木村 破損町 中野村 高円寺村

上 落合村 上高田村 東 西 大久保村 諏訪谷村 源兵衛村

上戸塚村 改代町 牛込水道町 馬場先片町 五軒町

築地片町 法蔵院門前 (宝力) 等覚寺門前 肴町 通寺町

岩戸町 壹丁目 小日向水道町 三ヶ寺門前 川添屋敷 松ヶ枝町

西 東 古川町 八幡坂町 金剛寺門前 小日向台町 五軒町

大六天前町 称名寺前町 小石川金杉水道町 音羽町 壹丁目より 九丁目迄

桜木町 東 西 青柳町 大坂上町 同坂下町 同仲町

大塚町 窪町 小石川新田 滝野川村 王子村

西ヶ原村 上中里村 中里村共 巢鴨村 原 町 壹丁目 貳丁目

仲町 御駕籠町 小石川原町 同大原町 五軒町

宮下町 七軒町 火之番町 六蔵屋敷 指ヶ谷町 壹丁目 貳丁目

戸崎町 白山前町

都合百六ヶ所

王子筋江 御成之節

谷中感応寺古門前町 新門前町 中門前町 片町

表門前新茶屋町 谷中町 七面前町 九ヶ寺門前町

善光寺御門前町 三崎町 玉林寺門前町 根津門前町

同宮永町 谷中本村 新堀村 田端村 豊島村

神谷村 下村 梶原堀之内村 鹿浜村新田共 堀之内村

三河島村 町屋村 船方村 上 下 尾久村 小台村 川口宿

元郷村 領家村 横曾根村 浮間村 飯塚村

蕨宿 志村 小豆沢村 池袋村 新田堀之内村

中丸村 今井窪村 長崎村 雑司ヶ谷村 下高田村

大塚坂下町 同上町 仲町 窪町 大塚町

西 東 青柳町 小石川新田 音羽町 壹丁目より 九丁目迄 桜木町 川添屋敷

上十条村 稲付村 赤羽根村 袋村 岩淵宿

滝野川村 王子村 西ヶ原村 上中里村 中里村

上駒込村 同肴町 同片町 千駄木村 浅嘉町

上富士前町 七軒町 妙儀坂下町 上金杉村町共 三之輪村町共

通新町 中村町 小塚原町 山王門前町 下板橋宿

上板橋宿 前野村 蓮沼村 中台村 西台村 下練馬村

巢鴨村 原町 式丁目 御駕籠町 仲町 小石川火之番町

七軒町 宮下町 五軒町 六蔵屋敷 原町 大原町

指ヶ谷町 一丁目 二丁目 戸崎町 御掃除町 柳町 白山前町

都合百四ヶ所

駒場野江 御成之節

上中豊沢村 上中渋谷村寺社領共 穂田村 原宿村 久保町

下千駄ヶ谷村町共 宮益町 麻布広尾町 三田町 白銀村

白銀台町 一丁目より 十一丁目迄 長峰村 今里村 上北沢村 代田村

松原村 赤堤村 和泉村 上目黒村 石川組 五本木組 上ヶ知

中下目黒村町共 小山村 上中延村 代々木村 幡ヶ谷村

上角筈村 和田村 中馬引沢村 用賀村 世田ヶ谷新町

下野沢村 池尻村 三宿村 池沢村 太子堂村

若林村 世田ヶ谷村 経道在家村 弦巻村 下渋谷崎組
上ヶ知 広尾町

都合四拾三ヶ所

此外 御成場所ニ寄持場相替候得共、縦令は木下川筋・小松川筋・船堀筋杯申候様成る 御成之節御府内近辺持場之儀者、須崎筋又者亀有筋 御成之節と同様ニ而、在々ニ至持場相替候場所御徒方持場与遥ニ欠隔り引合等無之 御成筋之儀者省略仕相替不申候

右之通多人数出役仕村々町々其所之役人共江、御取締并火元等之儀第一ニ申渡、村町難渋之儀又者不法之筋合等無之哉、御趣意ヲ相含度々見廻り等も仕相勤、人留繩張等之儀差因仕為致候、然ル所右持場御徒方持場与入合候場所も御座候、右様之儀者品ニ寄双方打合仕相勤申度奉存候、尤人留繩張等之儀御徒方心得与、私共仕来与少し異同御座候場所も御座候、右様之場所之儀者猶更篤与打合仕、其便宜方江附候而取計候様仕度奉存候、且持場殊之外手広之場所も御座候而出役人数引足不申、忝人ニ而数ヶ所引受見廻り仕候儀ニ御座候、御徒方払後ニ相成候得者相通不申、差支候儀者度々御座候、何卒已来之儀者御徒方払後ニ而も無差支通行相成候様仕度奉存候、御尋ニ付此段申上候、以上

寅三月

在方出役

文政十三寅年六月廿七日内匠殿御渡有之候書面、翌廿八日承付いたし御同人江返上、同日都合式通古沢茂右衛門宅ニ而杉山八之助立

合、御中間田野村弥六・御小人長田八五郎江申渡候

御中間頭江
御小人頭

一、在方出役持場之内御徒方持場入合候場所、繩張人留等之義其外勤方区々之義も有之申合不行届、品ニ寄於場所可及争論程之儀も有之候趣ニ付、此度 両丸御徒頭江掛合之上已来双方申合行届候様掛合相濟候間、其段相心得於場所打合事等物和らかに申談、右ニ而も不行届義者其場所にて不取極候而も、御差支ニ不相成儀者其始末当番所江申聞、追而篤与致掛合可申候、且是迄御道筋御場内留切中者在方出役之者往来差留申渡し、見廻り等茂差支候儀も有之趣ニ付、以来差支無之通行いたし候様御徒頭江掛合相濟候間、其通り相心得留切中者御徒方江名面申断相通可申候、勿論御目障ニ不相成候様進退可致候事

但在方出役之者名面替・役替等有之節其度々相届可申候事

一、是迄勤方未熟之者も有之趣相聞候得共、先此度者沙汰ニ不及候、前条之通取極メも附候上者、心得違無之様精々入念相勤可申并着服等之儀も中二者心得違ニ而御役羽織・股引等者相用候得共、往来之者ニも紛敷風俗致候者も有之候よし如何之事ニ候、已来御役羽織・股引・半天・草履急度相用、往来之者ニ紛敷風俗致し申間敷候、且宿場其外ニ而美酒食等差出候儀有之候共、決而受用致間敷候事

但廻状持參之者・村方取調之者ハ格別、其外之者者宿場・村方等江決而止宿致間敷候事

一、御成相濟候ハ、持場之内相替儀無之哉之有無、当日ニ而も翌日ニ

而も当番所迄相届可申候

但銘々相届候ニ者不及候間、一同打合之上老人罷出相届可申

候事

右之趣急度可申渡候事

六月

曾根内匠

在方出役勤方其外等之儀ニ付、此度別紙書面之通申渡候様内匠殿被申渡候ニ付申渡候間、書面之趣一同厚く相心得、心得違之儀無之様可被致候、一鉢右出役之儀者不輕御用筋之義銘々被相心得候事ニ候得共、右御趣意を不失候様兼々心掛、猶又諸事入念相勤候様可被致候

一、御成之節々出役罷出候砌、銘々之持場所江罷越候途中、外之者持場江立寄御用向も無之ニ手間取候者も有之哉ニ候、御用向打合等有之節格別左も無之候ハ、銘々之持場所江直ニ相越候様可被致候、都而御用も無之場所江相集候義被致間敷候 還御相濟引払之節も是又同様相心得、持場ニ寄直ニ引取可被申候、且出役場所ニ而酒等相用候義無之者勿論之事ニ候処、品ニ寄相用候者も間々有之哉之趣相聞候、右ニ而者其場所ニ在町役人共江之申談方茂自然行届申間敷哉も難計、其上彼方役人共取用方も薄く相成候様ニ而者銘々精勤被致候詮も無之、甚以不宜事ニ候間、一同申合出役先ニ而決而酒相用不申様可被致候

一、御成相濟持場之内相替儀無之哉之有無、当番所江相届候儀当日(候脱之)ニハ、御供之拙者共江も其段相届可申候、翌日相届候ハ、御城ニ而詰番之拙者共江相届候様可被致候

右之趣申渡候間、一同能々申合心得違之義無之様可被致候

寅六月

御中間頭
御小人頭

〔朱書〕
〔百九拾四〕

文政十三寅年十二月十六日

一、惣出仕有之、年号天保卜改元被 仰出候旨上村吉兵衛相達候事

〔朱書〕
〔百九拾五〕

寅十月

一、拾五俵 忝人扶持 御譜代之者

鈴木宇右衛門組
御中間組頭
岩堀孫次郎

御奉公年数式拾三年

明和五子年十一月御中間江御抱入被 仰付、安永三年八月父跡式被下置、天明七未年九月御中間目付被 仰付、寛政十二申年五月御台所番被 仰付、文化元子年九月病氣ニ付願之通御目付支配無役被 仰付、同五辰年二月病氣快氣仕御中間江御入人被 仰付、同十四丑年三月御中間組頭被 仰付、文化五辰年より当寅年迄式拾三年相勤罷在候

右之通出精相勤罷在候者ニ御座候処、老衰仕御奉公難相勤隠居奉願候、然ル所七十歳以上之者ニ付相応之御褒美奉願度奉存候得共、御奉公年数式拾年程ニ而奉願候先例書留相見不申候、乍去御場所者違ひ上下格引下勤ニ者御座候得共、別紙之通伊賀者青山四郎兵衛義

者御奉公式拾四年相勤候者ニ而御褒美被下候由及承、且享保五子年三月和泉守殿被成御渡候御書取之趣ニ而者、勤拾年以上七十歳以上ニ而者御褒美奉願不苦哉ニも奉存候、併右享保之御書付も私記之内見当候儀ニ而其後若御改革被為在候被仰渡も有之候哉も不奉存候間、旁差極候儀ニ者難申上御座候得共年寄候迄孫次郎儀出精相勤候者ニ付、何卒相応之御褒美被下置候様仕度奉存候間、此

度隱居家督伺差上候節老衰御褒美之願書定例之通取調相添差出申度奉存候間、御内慮奉伺候、以上

寅十月

別紙

御中間頭
鈴木宇右衛門

御奉公年数式拾四年

右文政四巳年五月十六日老衰ニ付御褒美銀拾枚被下置候旨、京極周防守殿被仰渡候、以上

寅十月

別紙

御中間頭
鈴木宇右衛門

覚

一、組支配之者之内当役十年勤候七十歳以上之者御役又者御番 御免願候節御褒美可相願存候者、其者之勤常々精出候哉此段吟味之上書付可被出候

一、十年以来御加恩被下候者之事

一、十年以来他国御用伺在番等病氣ニ付御断申上候者之事

一、五ヶ年以来閉門逼塞被 仰付候者之事

此三ヶ条於有之者御褒美被下間敷候

右御書付享保五子年三月水野和泉守殿御渡被成候御書付之内、

少々御文言改り候間、向後此趣相心得候様御口上ニ而被仰渡候

右者持伝候手扣帳之内ニ記し御座候間書写仕相添差上申候、以上

寅十月

御中間頭

鈴木宇右衛門

文政十三寅年十月十八日

右之通御内慮伺例書御見合之書付共三通月番十郎左衛門殿江口

上添差出候処、同月廿四日左之書付添右者席以上ニ候得者勤拾

年以上ニ而も七十歳以上之者御褒美被下候得共、羽織格ニ而者

三拾年以上之勤七十歳ニ而無之候得者、御褒美相成不申旨十郎

左衛門殿口上ニ而被仰渡、此方より差出候書付三通共御下ケニ

付落手、尤問合候者奥御右筆桑山六左衛門ニ御座候

文政四巳年五月

御簾中様御広敷伊賀者

青山四郎兵衛

巳七十三歳

銀十枚

右老衰ニ付願之通小普請入候、年寄候迄無懈怠相勤候ニ付御褒美

被下旨、於焼火之間京極周防守申渡之

但引下ケ勤之者ニ付席ニ而申渡之

右書付添十郎左衛門殿被仰聞候事

(朱書) 二百九拾六

文政改元

天保元寅年十二月十八日御書付を以內膳正殿被仰渡候段、中根平十郎立合堀小四郎被申渡候

西丸御目付江

西丸御徒目付

千種素三郎

同 御小人目付

伊藤久八

同 御使之者

粕屋三郎兵衛

去ル六日三河島筋江

内府様為御鷹野被為 成 還御之節、

大川橋梁間ニ雑人躰之男伏居候処、心得不申段不調法之事ニ候、

依之押込申付之

右之通可被申渡候

天保二卯三月七日内膳正殿被仰渡候、段平十郎殿立合小四郎殿被

申渡書面鱗附返上

西丸御徒目付

千種素三郎

同 御小人目付

伊藤久八

同 御使之者

粕屋三郎兵衛

右押込可差免旨内膳正殿被仰渡候段可申渡候事

(朱書)

二百九拾七

天保二卯年

御台傘 御小人 御日傘 同 御雨傘 同 御床机 同 御使組頭 御徒目付 御徒目付

○ 御小人目付 招壺本 勢子 御徒頭 御徒組頭 御徒十二人

○ 御小人目付 招壺本 勢子 御徒頭 御徒組頭 御徒十二人

○ 招壺本 御徒組頭 御徒十一人 招壺本 御徒頭

○ 招壺本 御徒組頭 御徒十一人 招壺本 御徒頭

○ 御徒組頭 御徒十二人 招壺本 御徒組頭 御徒十一人 四半 壺本

○ 御徒組頭 御徒十二人 招壺本 御徒組頭 御徒十一人 四半 壺本

○ 勢子 小十人頭 小十人組頭 小十人 拾五人 四半 壺本 小十人組頭

○ 勢子 小十人頭 小十人組頭 小十人 拾五人 四半 壺本 小十人組頭

○ 小十人十五人 御馬乘騎馬 落見 御使番 纏 騎馬 御書院番頭 同

○ 小十人十五人 騎馬 落見 御目付 同 御徒頭 纏 騎馬 御書院番頭 同

○ 小十人十五人 同 御使番 纏 御書院番頭 同

○ 同 御馬乘 同 御番方五拾騎 同 同組頭 纏 同 御小性組番頭

○ 同組頭 同 御番方五拾騎 同 同組頭 纏 同 御書院番頭

○ 同組頭 同 御番方五拾騎 同 同組頭 纏 同 御書院番頭

○ 落見 御使番 同 御鳥見 御鉄炮方

○ 同 御徒頭 落見 御目付 御鑓

○ 同 御使番 御鳥見 御貝役

○ 同 同 御鷹匠頭 御犬 同 同

○ 同 同 御鷹匠頭見習 御犬 同 同

○ 御鷹 同 同 御鷹匠組頭 御鷹方 手明

○ 御鷹 同 同 御鷹匠組頭 御鷹方 手明

面々も上下共道中混雑無之様心掛、木銭・米代者勿論、其外買物等も売上請取扱方不行届義無之様可申渡事

七月

加藤修理

以上

浦和

上尾
板橋

御下向休泊割

御昼休

御泊

同九月十三日当番所より差越承付返却

一、明後十五日 有君御方御到着之節

御注進左之通

御本丸
御広敷江

大津

草津

一、板橋宿 御出立

被遊候由

御広敷江

守山

武佐

一、森川宿 御先

見え候由

同断

愛知川

鳥井本

一、水道橋迄 御先

見え候由

同断

柏原

垂井

右御注進御使之者板橋宿江七時相揃書面之通御注進可申事

美江寺

加納

但御広敷江申込候節取次之者差出置候事

鷓沼

太田

右之通可申渡候事

九月十三日 佐橋市左衛門

御嶽

大久手

大井

落合

上松

野尻

萩原(載カ)

福島

洗馬

贅川

和田

下諏訪

八幡

長窪

輕井沢

小田井

松井田

坂本

倉鹿野

板鼻

深谷

本庄

一、御通り之節前廉より人留ニ不及候、御通り之御先江立留可申候、御見通しニ而も遠き所ハ人留ニ不及候、少々見へ候程之儀者不苦候

鴻巣

熊谷

一、御道筋之屋敷々々大門者たて、く、りハ立寄置可申候事

一、長屋等窓蓋仕候ニ不及候、内より戸建可申候事

一、並手桶差出ニ不及候事

一、掃除之儀御道筋ハ格別、御見通し之場所者不及其儀候

一、御道筋御門番御番所江相詰ニ不及候事

右之通可被相触候

六月

(朱書)
「式百壹」

三月五日町年寄奈良屋市右衛門方江年番名主・肝煎組老入宛被相呼被申渡候趣

一、当卯秋觀世太夫勸進能興行ニ付惣町中出銀三千兩小間割付左之通

組々上中下三段割付

一、下之部小間壹間ニ付八分六リン壹毛宛

拾四番組町數百四拾壹ヶ所

此小間壹万百八拾四間貳尺八寸

此銀高八貫七百七拾壹匁七分

右割付之通相心得組合限り名主取計、來ル五月中迄ニ取集メ当役所江差出可申候、尤組合内場所宜敷分又者場末之分、右出銀高を目当ニ致し程能割合差支無之様可致旨被仰渡奉長候、為御請御帳江印形仕置候、以上

天保二卯年三月五日

組々
年番名主
肝煎名主

老人宛連印

(親)

右出銀集メ方之儀文化十二亥年八月興行之節者組々より勸世太夫江相渡候処、此度之儀者奈良屋役所江持參可致、尤組合銀合

銀ニいたし本両替屋包ニいたし差出可申候

一、町々之内ニ而類焼場等出銀難儀之趣杯申立候共、迎も御聞濟ニ者相成不申、拝領町屋其外ニも心得違無之様可申談候

先例

文化十二亥年八月

京間貳百拾貳間貳尺

此銀百五拾四匁九分九厘

此金貳兩貳分ト四匁九分九厘

御三組小間高

巢鴨

原町貳丁目

右之通ニ御座候間此段申上置候、尤此度之儀者類焼明地多ニ付先例よりも可成丈減致度申出置候、以上

卯三月

深谷市右衛門様

加藤源内 様

志村伊右衛門

右市右衛門より差出候間同役順達之上四月十二日差返ス

(朱書)
「式百貳」

天保二卯年七月二日吹上御庭より山里江 御成之節十郎左衛門殿被申聞

御駕籠頭老入勤之処、今朝俄病氣ニ付難罷出旨申越候間、御供頭代り組頭相廻り候旨、御当番勝次郎殿江申上候、然ル処右様之節者 御成有無ニ不拘当日当朝之内届申聞候様、十郎左衛門殿被申聞候事

(朱書)
「式百三」 式百九番可見合之事」

天保二卯年八月十五日讚岐守殿御尋ニ付同十六日茂右衛門・弥一
郎より差出ス

御中間
御小人
黒鋏之者
御掃除之者

右四役之者倅共先年者拾七歳以下ニ而も御抱入申上候義も御座
候、然ル処拾七歳以下倅共番入願書御請取被成間敷旨寛延二巳
年被仰合有之候処、其後拾七歳以下倅御番入願差上候面々も有
之、御請取被成候得共、以來拾七歳以下ニ候ハ、御番入願書差
上候而も先達而被仰合候通御請取被成間敷御沙汰之旨、天明八
申年五月被仰渡候後、拾七歳以下之者御抱入申上候儀無御座候、
御尋ニ付此段申上候、以上

申八月

四役頭

右同断ニ付弥一郎より讚岐守殿江差出ス

御小人方御人少ニ付両山 御成、遠 御成之節者手足り不申候
ニ付、無足部屋住ニ而罷在候惣領共拾三四歳ニ相成候得者、右
御成御供之方江其日限り御雇申渡差出御間ニ合来候、尤御雇
差出候者別段御手当等者無御座候、御尋ニ付此段申上候、以上
御小人頭

御八月

御小人頭

(朱書)
「式百四」

右者 御成其外罷出候御小人年齢拾七以下ニ相見、至而少キ御人
も有之、右ニ而も御宛行頂戴致居候もの哉、奥向より尋有之候趣
を以讚岐守殿御札有之候ニ付、前条四役倅共拾七歳以下之者御抱
入申上候義無之旨御答書差出候処、又々至而幼少もの見へ候趣御
尋ニ付、右之通御答書差出候事

天明八申年五月四日当番所より差越御徒押江相廻候御達書写

拾七歳以下倅共御番入願書御請取被成間敷旨、寛延二巳年被仰
合有之候処、其後拾七歳以下倅共御番入願書差上候面々も有之
御請取被成候得共、以來者拾七歳以下ニ候ハ、御番入願書差上
候而も先達而被仰合候通御請取被成間敷由御沙汰ニ候事

五月

菅沼新三郎

小普請

神尾豊後守組

永島八十吉養子

御目付支配無役

松森篤之進次男

永島大五郎

御二十九歳

右八十吉西丸切手番古坂弁蔵組同心相勤候節、文政十三寅年三
月篤之進次男大五郎儀養子ニ奉願被 仰付候、其後小普請入被
仰付罷在候処、右大五郎養父心底二応し不申双方熟談之上篤
之進方江取戻願書印附堅物無役世話役より御小人頭江差出候、
然ル処神尾豊後守より懸合来候、右答致可申処無役ニ而例無之、

五役評議いたし候得共、五役ニ而頭々聞置致し候得共、無役ニ而者進達いたし候方可然旨談決、然ル処五役元頭例ニ任せ此度養子取戻願此方ニ而者進達不致方ニ取極メ候様、御部屋を以被仰聞候間、右之振合ニ小普請支配神尾豊後守懸合書江答下ケ札いたし、卯八月廿日大林弥一郎より返却いたし候事

天保二卯年八月

(朱書)
「式百五」

天保二卯年八月九日差遣ス、同十八日下ケ札いたし返却

在方出役之者御小人方之分 御成之節々去春頃より兎角不参有之、右故無抛御中間方より出役之者ニ而出方廉々兼相勤罷在候、右者御小人方御人少故ニ而至極尤ニ者相聞候様ニ者候得共、兩方交り相勤候場所之処 御場近辺惣而在方持場内兼候場所之内ニ而、万一異変其外御吟味事等ニ相成候義出来候節者兼候不埒ニ相成可申奉存候、且兼候而も勤方差支無之儀ニ候ハ、是迄廉々多人数出し不申ニ及処、是亦調方行届不申趣御察当を請候ハ、最早一年も度々兼候廉多々有之処、於私共儀乍存打捨置候様ニ相聞、御同様等閑之取計方ニ相当り不可然哉ニ奉存候、併御組々御用多之上御人少之儀全乍存御氣之毒ニ存候得共、以来在方出役之者出方不揃無之様御取計難相成候哉此段及御相談候、右者御面談可申上奉存候得共、御賢慮次第以後之取極忘却不仕為ニ者書面ニ而認置方可然奉存候間、此趣書取候而及御覽申上候、決而廉立御懸合申上候筋ニ者無御座候間必々無御腹臆被仰下候様仕度、此段偏奉希候

卯八月

茂右衛門
宇右衛門
又兵衛

御書面組方在方出役之者去春頃より 御成之節々御人少故無抛差出不申候処、其御組方出役之者より 御場所兼相勤候ニ付若於御場所異変等之儀有之候而者御取計難被成旨被仰越御尤ニ奉存候、此上操合差出候様可申渡候、此段及御答候、以上

八月

八之助
伝兵衛
弥一郎

(朱書)
「式百六」

天保二卯八月七日壹通御当番市左衛門殿江差出ス

覚

右孫十郎・庄五郎儀遠州今切表為御用今朝五時品川宿通出立仕候旨相届申候、依之申上候、以上

御中間頭
鈴木宇右衛門
御小人頭
岩崎伝兵衛

八月七日

同八月廿七日御当番主膳殿江善丘を以差出ス

覚

鈴木宇右衛門組

御中間目付

岩堀孫十郎

岩崎伝兵衛組

御小人目付

内田庄五郎

右者遠州今切表為御用罷越候処、御用相濟昨廿六日夕七時帰府仕候旨相届申候、依之申上候、以上

卯八月廿七日

御中間頭

鈴木宇右衛門

御小人頭

岩崎伝兵衛

(朱書)
「式百八」

御届奉申上候覚

一、江守覚太夫妻もと儀一生之内御扶助米被下置候ニ付其節御目付支配無役加藤文左衛門方江引受罷在候処、其後私方江引受養育仕候処、右妻もと儀当卯七月中旬より痢病相煩十月朔日病死仕候ニ付、寺者丸山長泉寺江十月二日相葬申候、依之此段御届奉申上候、以上

浅草田原町式丁目

家主清七店

天保二卯年十月二日

引受人 安五郎 印

(朱書)
「式百七」

天保二卯八月廿九日御扣共式通、絵図面御扣共式枚相添、同役山崎又兵衛を以御月番市左衛門殿江差出ス、即日進達相濟候旨又兵衛申聞

屋敷奉願候書付

月番

佐橋市左衛門
大久保讚岐守

私儀拝領屋敷無御座候ニ付、浅草千束村中奥御小性関播磨守上ヶ地別紙絵図面之場所内ニ而、坪数相応被下置候様仕度奉願候
文政六未年四月願之通被下候間、所者見立相願候様京極周防
守殿被仰渡候、以上

卯八月

御中間頭

古沢茂右衛門

ここに挿入図あり(巻末参照)

右引受人安五郎申上候通相違無御座候間、依之御届申上候、以上

卯十月二日

江守覚太夫

元組合

小磯清九郎 印
鳥飼金兵衛 印

鈴木宇右衛門殿

卯十月四日御扣共三通月番 殿江差出ス

元御中間江守覚太夫妻
御扶助米上り之儀申上候書付

月番

曲淵勝次郎
大沢主馬

覚

鈴木半十郎組

元御中間

江守覚太夫妻

御扶助米式人扶持

もと

右寛太夫儀享和三亥年十一月江戸十里四方追放被 仰付候ニ付
妻もと江御扶助米奉願候処、文化元年三月一生之内御扶助米
式人扶持被下置候旨被仰渡頂戴仕罷在候処、右もと儀当月朔日
病死仕候間御扶助米上り之儀御勘定所江被仰渡可被下候、以上

卯十月

御中間頭

鈴木宇右衛門

(朱書)
「式百九 式百三番与見合事」

卯十一月九日讃岐守殿御尋ニ付差出ス

御小人手足り不申節者無足倅共御雇仕差出候廉々御尋ニ付
申上候

一、両山 御成之節御先傘・奥御道具等持人江相加差出申候
紅葉山

一、遠 御成之節者御鳥持・奥御道具等持人江相加差出申候

一、御城内 御成之節も格別御用多ニ而御人手足り不申候節者相加

差出申候

右之外輕キ御用柄江者差出、廉立候義ニ者為相勤不申候、以上

卯十一月

御小人頭

(朱書)
「式百拾」

天保二卯年十一月廿七日火附盜賊改永田与左衛門より之懸合書中
務殿御下ケ、当番所町野十太郎より 御城使を以為持差越候ニ付、
下ケ札いたし同人を以返上

無宿

源之丞

卯十九歳
右者拙者方江召捕致吟味候処、出生本郷元町御小人目付橋本佐
四郎四男、拾ヶ年以前午年十月申父相果候後兄佐次郎御小人被
仰付同人厄介ニ而罷在、身持不宜ニ付四ヶ年以前子年九月中
勘当久離請候旨申立候

右之通相違無之哉及御掛合候

十一月

書面源之丞儀四度目老人之男子ニ而文政六未年十二月惣領
除致同十一子年十一月久離御届差出申候、父者佐四郎与者
名乗不申佐次郎与申御中間目付相勤申候、尤御中間組之者
者御中間目付与唱、御小人組之者御小人目付与唱候而、
右佐次郎者御中間目付ニ而候得共、無差別惣而他向其外ニ
も御小人目付与唱候者仕来ニ而有之、文政九戌年九月病死
致候、兄者橋本惠次郎与申、当時組御中間相勤罷在源之丞
姉ニ婿養子ニ而相統致罷在候者ニ御座候

卯十一月

御中間頭

鈴木宇右衛門

(朱書)
「式百拾壹」

一、先祖長左衛門年月日不知

清揚院様江役儀不知御奉公申上

一、高祖父徳兵衛於竹橋 御殿御小人被 召抱滝三十郎組支配相勤

一、曾祖父長左衛門於同所父跡式被下小菅九太夫支配御口之者罷成

長左衛門事
今井勝右衛門

文昭院様西丸江被為 入候節御供仕 御本丸江被為 入候節御
中間頭大岡源右衛門組ニ罷成

御目付衆

筒井伊賀守

一、祖父長左衛門引統御中間相勤其後村松太兵衛支配御口之者相成
一、養父長左衛門從部屋住、村松太兵衛御口之者父跡式被下候後、
引統御口之者相勤

拝領町屋敷

御目付支配無役

今井勝右衛門

孝恭院様 薨御ニ付割組ニ被 仰付御中間頭松崎新右衛門組ニ成

天明元丑年西丸附御口之者組頭ニ成

一、勝右衛門享和元酉年十月養子ニ成同年十二月養父家督被下御口

之者ニ成、文化十三年四月病氣ニ付小普請入奉願候処、同年

五月十三日小普請入難相成御目付支配無役被 仰付候

拝領屋敷

本所吉田町、大繩二者無之候

坪数百拾五坪

表間口五間四尺九寸
裏行式拾間

右者村松四兵衛支配西丸御口之者伊庭又四郎与打込拝領仕候

右之通今井長左衛門より文化十三年五月無役世話役山崎吉五

郎・笠原永一郎江書付差出有之候之事

〔朱書〕
「式百拾式」

卯五月廿七日古沢茂右衛門方ニ而取調、廻し来ル

此度西丸御中間目付・御小人目付 人増人可被 仰付候間、御

中間・御小人より取調可申上旨被仰渡候ニ付取調候処、御中間

之儀御定人数内当時 人不足仕居、且者追々御用多ニ罷成居候

間平之方人数不足仕、平日御厩江之出方も差支候得共種々作略

仕先ハ可也ニ御間ニ合候得共、此上右増人 人被仰付候得者平御

中間又候 人不足仕候必至与平日出方差支可申哉当惑至極仕候、

右ニ付種々評議仕候処、享保二十卯年三月御小人目付増人、御

中間より五人・御小人より六人都合拾老人被 仰付、右五人之

明跡江御中間五人直ニ御抱入被 仰付、寛政四子年二月御小人目

付増人、御中間より九人・御小人より 人都合 人被 仰付候

書面今井勝右衛門拝領町屋敷坪数五拾七
坪ニ而候

十二月十二日

無役世話役
柳田勝太郎

ここに挿入図あり(巻末参照)

節、平御中間相減候処拾人相増御定人数五百五拾五人之積相心得候様同年五月廿九日坂部十郎右衛門殿被仰渡候、此度も右之通御定人数 人相増、此後五百五拾 人之積り被 仰付候而も、右明跡江当時御抱入不奉願候而も追々無役より御入人被 仰付候ハ、可也ニ御間ニ合可申哉奉存候、乍去此上御役出其外ニ而拾人以上之明キ出来仕候ハ、其節者前々之振合を以御抱入奉願候様仕度奉存候、左候得者御差支之儀も有御座間敷、可也御間ニ合可申哉ニ奉存候、御尋ニ付此段申上候、以上

卯月

但此度西丸御中間目付増人被 仰付候、是迄西丸御中間目付拾八人・御小人目付式拾式人都合四拾人ニ候処、人数平均ニ無御座候間、寛政四子年 御本丸御中間目付五拾人・御小人目付五拾人都合百人被 仰付候節之振合を以仮令者増人拾人被 仰付都合五拾人ニ以後相成候ハ、御中間より七人・御小人より三人被 仰付、御中間・御小人共式拾五人宛ニ相成候様名面取調可申奉存候、且右増人 大納言様被為在之候故を以被 仰付候義ニ候ハ、御持鐘・野方御使之者其外夫々増人も一同ニ被 仰付候様仕度奉存候、左様無之御中間目付計相増外役々増人以後奉願候節先達而申上後レニ相聞奉恐入候間此段も申上候

卯九月朔日

右者古沢・杉山・岩崎・大林・鈴木五人山崎宅江寄合、御小人頭存寄承り候上、此方之振合を以書面拵候之様申談候事

享和四子年二月六日西丸御中間目付・御小人目付増人伺豊前守殿江出久、同月十三日増人可申渡旨能登守殿被仰渡候段、細井豊前守殿・馬場大助殿被仰渡

石川友一左衛門組御中間
西丸野方御使之者
松永善之丞
同人組同断
仲ヶ間触番之者
岩下孫四郎

鈴木半十郎組同断
西丸野方御使之者
加藤又三郎

同人組同断

矢村藤太郎

長田八十五郎組御小人

西丸御使之者

伊藤松次郎

高倉助右衛門組同断

同断

池永吉四郎

近藤勝平組同断

同断

小池幸六

右西丸御中間目付・御小人目付増人可申渡旨能登守殿被仰渡候間可申渡候

二月十三日

此度西丸御中間目付・御小人目付増人可被 仰付哉ニ付、御中間・御小人より取調可申上旨被仰渡候ニ付取調候処、御中間之

儀御定人数五百五拾五人内当時六人不足仕居、且者追々御用多
罷成御用所・御用方・御使ニも多人数罷成候間、平之方人数不
足仕平日御厩江之出方も差支候得共種々作略仕先者可也ニ御間
ニ合候得共、此上右増人被 仰付候而者平御中間又候不足仕、
且御目付衆御支配無役之者より御奉公出相願候者も可有之哉与
穿鑿仕候得共、此節御中間江御入人相願候者無御座旨無役世話
役申聞候、左候而者平日出方必至与差支可申哉与当惑至極仕候、
何卒可相成義ニ御座候ハ、此度御中間目付増人弥被 仰付候義
ニ御座候ハ、其人数丈新規御抱入被 仰付被下置候様仕度奉
願候、右御尋ニ付別紙相添此段申上候、以上

卯七月

御中間頭

古沢茂右衛門

鈴木宇右衛門

山崎又兵衛

別紙

享保二十卯年三月御小人目付増人御中間より五人・御小人より
六人都合拾壹人被 仰付、右五人之明跡江御中間五人直ニ御抱
入被 仰付候

一、寛政四子年二月御小人目付増人御中間より九人・御小人より五
人都合拾四人被 仰付候節、平御中間相減候処拾人相増御定人
数五百五拾五人之積相心得候様坂部十郎右衛門殿被仰渡候
右之通御座候、以上

卯七月

御中間頭

承知

神尾安左衛門(市カ)

寛政三亥年十二月十七日

御書面之通被仰渡奉承知候、以上

御中間頭

亥十二月十七日 吉田作兵衛

御小人頭

平島西右衛門

対馬守殿

月番

森山源五郎

石川六右衛門

御中間目付・御小人目付之儀者一同御小人目付与申候、右御中
間目付・御小人目付兩役ニ而人数前々者百弍拾人余之事も有之、
又殊之外減し候事も有之御定無御座候、此節者八拾六人有之候、
当時ニ而者諸掛・出役等も多く御小人目付引足り不申、無抛御
中間・御小人之内より仕来ニ而申上不仕、御小人目付之勤方為
手伝申候、其外出役多入候節者加え卜号御小人目付之代りニ御
中間・御小人之内より差出申候、依之御取締不宜事粗有之候而
如何ニ御座候、依之可相成儀ニ御座候ハ、以来御中間目付五拾
人・御小人目付五拾人都合定人数百人ニ相極、可成丈手伝并加
等者減候様操合候ハ、格別御取締ニ相成可申候、右之趣ニ被仰
渡候得者御中間・御小人平勤之者減候間無役之内より御中間拾
人・御小人拾人過人被仰渡被下置候様仕度奉存候、左候得者御小
人目付着用仕候袷羽織十四相増申候、且無役より過人ニ罷出候
御中間・御小人ニ而二十人分単羽織二十相増可申候、御小人目
付ニ相成候拾四人之単羽織流用仕候間六ツ増ニ相成、都合拾羽
織十四単羽織六ツ相増候而已ニ而御切米御扶持方等相増候儀も
無御座候、御取締り者付キ申候、右ニ付何卒前書之通被仰渡候
様仕度奉存候、弥右之通被仰渡候ハ、人物相撰可申上候、以上

亥十二月

御目付

(朱書)
「式百拾三」

天保三辰年二月廿四日御扣共式通御当番讚岐守殿江差出候処、後刻御附札を以河内守殿被仰渡候段、修理殿立合讚岐守殿被申渡書面齎付返上、即日於宇右衛門宅直二馬之助江申渡

御中間目付押込伺

大久保讚岐守

覚

養方從弟之統

鈴木宇右衛門組

御中間目付

山崎馬之助

右馬之助養方從弟奥坊主岩崎順勝儀、昨廿三日於榊原主計頭御役宅吟味中揚屋江被差遣候旨、牧野中務立合主計頭申渡奉恐入候旨申聞候、依之馬之助儀押込置可申哉奉伺候、以上

辰二月廿四日

御中間頭

鈴木宇右衛門

御目見遠慮之格可被申渡候

同廿五日御扣共式通御当番小四郎殿江差出入、後刻御附札を以書面之通可心得旨被仰渡

鈴木宇右衛門組

御中間目付

山崎馬之助

右馬之助義養方從弟奥坊主岩崎順勝揚屋江被遣候二付、昨廿四日

御目見遠慮之格被 仰付候、然ル処順勝宅番之儀親類共申

合可致旨、河内守殿被仰渡候段、奥坊主組頭白井宗休より相達候得共、如何相心得可申哉之旨馬之助申出候、宅番罷出候様可申渡哉奉伺候、以上

二月廿五日

御中間頭

鈴木宇右衛門

書面之通可心得候

同六月十九日御扣共式通御当番中務殿江差出、後刻御附札を以肥後守殿被仰渡候段、五郎作殿立合中務殿被申渡書面齎付返上、即日宇右衛門宅おゐて馬之助江申渡

御中間目付

御目見遠慮之格被

牧野中務

覚

御目見遠慮之格

鈴木宇右衛門組

御中間目付

山崎馬之助

右馬之助養方從弟奥坊主順勝儀御吟味之儀有之、当辰二月廿三日揚屋江被差遣候二付身分之儀奉伺候処、書面之通被 仰付罷在、然ル処昨十八日順勝儀遠島被 仰付候旨、於榊原主計頭御役宅牧野中務立合主計頭申渡奉恐入候旨申聞候、依之馬之助此上之儀奉伺候、以上

辰六月十九日

御中間頭

鈴木宇右衛門

御目見遠慮之格可申渡候

同七月十四日肥後守殿御書付を以被仰渡候段、五郎作殿立合主膳殿被申渡鱒付返上、即日於宅馬之助江申渡

御目付江

御目見遠慮之格可被差免候

御中間
山崎馬之助

〔朱書〕
「式百拾四」

町奉行 衆
御勘定奉行衆
同吟味役 衆

覚

清水殿勘定組頭川村八兵衛儀、御吟味之儀有之揚屋江被遣候処、於揚屋病死仕当十八日右一件落着ニ付、本郷元町拝領屋敷七拾坪余上り地ニ相成候、右者御中間大繩地ニ付取戻願差出可申奉存候、然ル処右地代金上り高引当ニ而町会所金貸受有之候由ニ付、右殘金返納之儀者此方ニ而引請皆済可致旨申上取戻之儀可奉願奉存候、尤文化二丑年六月元御中間江守覚大夫上り地之節、会所金返納皆済迄余人江被下候義御見合有之候積元伺済之趣を以町奉行衆・御勘定奉行衆より御達有之、其節も此方ニ而引請返納之積申上願之通元組江御返相成候、其節去ル未年九月小普請池田助七郎甲府勝手被 仰付町屋敷上り候節も、御懸合之上右之振合を以取戻候儀申上、是又願之通元組江御返ニ相成候間、此度も右之通仕度御差支之儀も無御座候哉、此段町奉行衆・御勘定

奉行衆・御勘定吟味役衆江御掛合被下候様仕度奉存候、以上

〔朱書〕
「天保二 卯十二月」

御中間頭

右之通御中間頭申候間及御掛合候、以上

卯十二月

佐橋市左衛門
大久保讀岐守

御書面清水殿勘定組頭川村八兵衛拝領町屋敷本郷元町地面地代上り高引当ニ会所金貸付有之候処、同人儀此度揚屋江被遣於揚屋病死致右地面上り地ニ相成候処、右地所者御中間大繩屋敷之儀ニ付、地面取戻之儀御中間頭より相願候積ニ付差支之儀も無之候哉之旨御掛合之趣致承知候、右者都而町会所金貸付有之候地面上ケ地ニ相成候節、貸付殘金有之候得者、右上り高町会所江取立皆済迄者余人江不被下積兼而伺済之儀ニ者有之候得共、右者大繩地ニ付組合仲間ニ而殘金引請皆済いたし候積を以、地所取戻之儀御伺有之候得者於町会所差支之儀無之候、此段及御挨拶候

辰正月

榊原主計頭
筒井伊賀守
村垣淡路守
館野忠四郎

天保三辰正月廿七日御扣共三通、例書迄通添差出ス

御中間大繩屋敷取戻之儀奉願候書付 月番

牧野中務
土岐主膳

覚

拝領町屋敷
本郷元町

清水殿
元勘定組頭

七拾坪余

川村八兵衛

右八兵衛儀御吟味之儀有之揚屋江被遣候処、於揚屋病死仕去十二月十八日右一件落着に付拝領町屋敷上り申候、右者御中間大縄屋敷御座候間先格之通御中間組江御返被下候様奉願候、以上

辰正月

御中間頭

古沢茂右衛門

鈴木宇右衛門

山崎又兵衛

下ケ札

本文川村八兵衛儀拝領町屋敷上り高を以町会所金借用有之候ニ付、殘金返納此方江引請皆済可為仕候間、取戻之儀奉願候而も御差支之儀無之哉之旨、町奉行・御勘定奉行・御勘定吟味役江及懸合候処、差支之儀無之旨申問候間願之通被 仰付被下候様仕度奉存候

例書

元小普請

岩本内膳止組

池田助七郎

右助七郎儀甲府勝手小普請被 仰付拝領町屋敷上り地ニ相成候処、御中間大縄屋敷ニ付文政六未年八月取戻之儀申上候処、同年九月願之通元組江御返被下候旨周防守殿被仰渡候

辰正月

御中間頭

山崎又兵衛

元小普請

彦坂近江守組

伊藤弥助

右弥助儀甲府勝手小普請被 仰付拝領町屋敷上り地ニ相成候

処、御中間大縄屋敷ニ付文政七申年十二月廿日取戻之儀申上候処、同月廿九日願之通元組江御返被下候旨撰津守殿被仰渡候右者例書之外心得之ため書取孝益江遣ス

辰二月廿九日古沢茂右衛門より廻状ニ申来ル

拝領町屋敷

本郷元町

七拾坪余

清水殿

元勘定組頭

川村八兵衛

右八兵衛上り地御中間大縄屋敷ニ付取戻願

右願之通河内守殿被仰渡候段、小四郎殿立合市左衛門殿被申渡書面繕付返上

〔朱書〕
「式百拾五」

天保三辰年三月十七日讃岐守殿江出ス

拝領町屋敷

本郷元町

御中間大縄之内

大坂御破損奉行

鈴木栄助

右栄助儀今般大坂表江引越候ニ付右屋敷差上可申儀与奉存候処、御暇も相済候得共屋敷差上候沙汰も不承及候ニ付、近日出立ニ相成候間其以前差上候様仕度奉願候、右屋敷之儀御中間大縄ニ而小給之者御奉公為取統被下置候義ニ而、右様御取立相成候もの殊ニ遠国勤被 仰付候もの、大縄屋敷持居候得者御中間・御小人無屋敷之者多く、御奉公取統も難相成御座候得者自然与勤向も不行届候義御座候、其上屋敷内万一異変等有之候而も遠国ニ而者

懸合等も難致差支ニ相成候間、前文奉願候通屋敷差上候様仕度、殊ニ此度差上申候得者以来之例ニ相成、御中間・御小人其外共大縄屋敷減、當時其筋相勤候小給之者無屋敷ニ而御取立ニ相成候、他場所之者町屋敷所持仕尤坪数等も少く御座候ニ付住宅仕候者少く、多分貸地ニ而已いたし置候もの多く御中間・御小人等相勤候者右屋敷住宅仕其餘町人共貸置地代上り高を以取続仕候義ニ御座候、尤此度初而之儀ニ付厚く御評議被成下候様仕度、此段御内意申上候、以上

辰三月

御中間頭
山崎又兵衛

同月廿二日右御同人江出ス

大坂御破損奉行鈴木栄助儀此度大坂表江引越候ニ付、拝領町屋敷御中間大縄屋敷之儀ニ付差上可申与奉存候得共、差上候沙汰も無之近々出立ニも相成候間其以前差上候様仕度段、又兵衛一名を以別紙之通申上候旨同人申聞候ニ付評議仕候処、右栄助義若も是迄之内ニ屋敷御引替願等ニ而も相済居候哉も難計奉存候間右等之訳同人江承合候処、未御引替願等者差出申候得共大坂表江着之上ニ而、拝領屋敷御引替願差出候積大目付衆江申上置候段申聞候ニ付、左候得者全く打捨置候義ニ而も無御座筋立不申義者相聞不申、且者遠国江引越候ニ付屋敷差上候様相成候ハ、外々江之障りニも相成申間敷与者奉存候得共、御中間・御小人よりは迄追々御目見以上江御取立ニ相成候者之内ニ者元拝領大縄町屋敷其儘持居候者も御座候間、夫等江も響キ時宜ニ寄難儀仕候者も出来可仕哉ニ奉存候間、此度之処御勘弁を以先者其儘御差置可被

成下哉之段申上候義御座候、然ル処此度其儘ニ致置候ハ、追々御中間大縄屋敷相減候様相成、小給之者共取続難儀も可仕候間得与相考可申上旨被仰渡誠以難有奉存候、右ニ付猶又評儀仕候

処栄助儀者 御目見以上ニ而遠国江引越候与申廉ニ而此度屋敷

差上候様相成候ハ、外々之障りニも相成申間敷哉ニ奉存候得

共、一牀大縄屋敷ニ而御座候而茂御譜代之者ニ而是迄御取立被

仰付候者之内屋敷武士地御引替願差上候得者、願之通屋敷引

替被下候間場所見立可相願旨被仰渡有之候、其後見立候迄者矢

張大縄屋敷持来り候義御座候間、此度栄助義も彼地より引替願

差上候ハ、前書之通被仰渡有之、其後見立候迄ハ大縄屋敷其儘

持居候義与奉存候得共、屋敷如何致候哉相分り不申殊ニ遠国江

近々出立ニも御座候間、先差急御内意奉伺候義ニ御座候、以上

辰三月

御中間頭
古沢茂右衛門
鈴木宇右衛門
山崎又兵衛

(朱書)
「式百拾六」

天保三辰年七月十三日市左衛門殿当番所小幡万兵衛を以御下ケ

御譜代并御抱もの之内重追放以下之御仕置ニ相成候者之倅兼而

別規ニ被 召出、又者御抱ニ相成居候者父御仕置ニ相成候節之

先例、御支配向杯之内ニ有之候ハ、御書拔御貫申度候事

寛政七卯年十一月廿九日

一、御小人頭笠原五太夫組御小人井野彦七中追放被 仰付候ニ付彦

七倅井野彦三郎弟善太夫是迄番遠慮被 仰付罷在候処、翌晦日
此上之儀相伺候処、十二月四日兵部少輔殿御附札を以左之通被
仰渡候

御附札

井野善太夫者番遠慮可申渡候
井野彦三郎事者以別紙相達候

一、同日於矢部彦五郎殿御宅御同人被仰渡候

御目付江

元御小人彦七倅

御小人

井野彦三郎

父彦七不屈之品有之中追放被 仰付候、依之御扶持切米被

召放候

右之通可被申渡候

(朱書)

辰七月「十七日出ス」

黒楸之者頭

御掃除之者頭

御中間頭

御小人頭

御駕籠之者頭

右老通当番所小幡万兵衛江遣ス

寛政七卯年七月二日

一、浜吟味役遠藤八十郎・大橋幸市勤方不宜御暇ニ相成候ニ付、翌
三日幸市倅大橋元六押込伺差出候処、翌四日左之御附札を以備
前守殿被仰渡候段、村上大学殿立合小長谷能登守殿被申渡父子
共御抱入之者ニ御座候

御附札

不及此儀候

辰七月「十七日出ス」
(朱書)

黒楸之者頭

御掃除之者頭

御中間頭

御小人頭

御駕籠之者頭

右老通当番所伝左衛門江遣ス

一、前書井野彦七方之書面江左之下ケ札いたし来候間、調具候様高

倉助五郎申聞差越候ニ付

下ケ札

〔本文井野善太夫儀者別段御抱入ニ相成候ものニ候哉

右者杉山組井野時蔵与申もの当時勤居候間、札之上左之書面当

番所小野伝左衛門江遣ス

井野善太夫

右善太夫儀井野彦七弟ニ而天明元五年十一月御小人明跡江御

抱入被 仰付候ものニ御座候

辰七月

寛政七卯年八月廿二日

一、五太夫組井野彦七明廿三日八時同道人差添評定所江差出可申
旨、池田筑後守・坂部能登守・村上大学より御達書長門守殿立
佐を以被遣
一、右之趣翌廿三日評定所江差出候旨御届主水殿江申上候

同年八月廿四日

一、五大夫組井野彦七昨日評定所江差出候処申口不相分候ニ付、揚屋江差遣候旨坂部能登守申渡候段御届式通

一、右ニ付彦七俵井野彦三郎并同人弟井野善大夫押込伺六左衛門殿江差出候処後刻兵部少輔殿

御附札左之通

番遠慮可被申渡候

右六左衛門殿被仰渡鱒付返上

宝曆六丑年五月三日落着

牢死存命候得者磔可被

仰付候

儀左衛門総領

東浦伊八

三浦五左衛門組

御中間

東浦儀左衛門

同人妻

みね

同人次男

東浦又市

同人娘

はねいつ

急度叱り

御扶持被 召放

御構無之

同断

右ニ付又市押込伺丑五月四日差出候処同九日御書付を以佐渡守殿被仰渡候段、正木大膳立合大久保荒之助申渡

御目付江

御中間

東浦又市

父儀左衛門御扶持被 召放候ニ付右又市御扶持召放候、其段可被申渡候

台徳院様御代

御中間ニ被 召抱
御譜代之者

右之通御座候、以上

七月廿九日

東浦儀左衛門

黒鍬之者頭

御掃除之者頭

御中間頭

御小人頭

御駕籠之者頭

右市左衛門殿より御催促ニ付小野伝左衛門を以上ル

〔朱書〕
「式百拾七」

天保三辰年十月九日当番所小野伝左衛門を以御達、三役承付返却

一、文化十四丑年より文政十二丑年迄都合拾三ヶ年分、御挑灯奉行

より請取候蠟燭員数并掛目共壱ヶ年毎ニ取調可差出旨

御達

火之番組頭

御挑灯奉行

御中間頭

御小人頭

御駕籠之者頭

渡方之事

辰八月十日当番所小幡万兵衛江別紙とも式通遣ス

文化九申年より同十三子年迄五ヶ年分并ニ去々寅年・去卯年分

共遠 御成之節、御駕籠御注進御用 通御并御規式 御成 御

方々様御広敷江被為 入、且都而御規式日其外ニ而御老中方・

若年寄衆御退出夜ニ入候節々共、御挑灯奉行より御中間方御

門々々江請取候蠟燭別紙之通御座候、以上

辰八月

御中間頭

文化九申年より同十三子年迄五ヶ年分、御挑灯奉行より御中間
方江請取候蠟燭左之通

文化九申年正月より十二月迄受取候分

三百八拾九挺 式拾匁掛
貳百五拾三挺 拾五匁掛
九拾六挺 拾匁掛

同十四年右同断

貳百八拾四挺 式拾匁掛
七百五拾七挺 拾五匁掛
六拾六挺 拾匁掛

同十一戌年右同断

貳百貳拾三挺 式拾匁掛
八百四拾三挺 拾五匁掛
百五拾貳挺 拾匁掛

同十二亥年右同断

百五拾四挺 式拾目掛
八百七挺 拾五匁掛
百貳拾六挺 拾匁掛

同十三子年右同断

貳百四拾四挺 式拾目掛
六百拾七挺 拾五匁掛
百五拾挺 拾匁掛

去々寅年・去卯年貳ヶ年分右同断

去々寅年四月より十二月迄請取候分
貳百貳拾壹挺 式拾匁掛
四百拾壹挺 拾五匁掛

百拾四挺

拾匁掛

去卯年右同断

百七拾挺 式拾目掛
四百五拾六挺 拾五匁掛
百五拾貳挺 拾匁掛

右之通御座候、以上

辰八月

御中間頭

三番所之分書出し高左之通

覚

文化九申年請取候御蠟燭

惣ノ六百四拾貳挺内

兩御丸様 通御并 式拾目掛
御規式之節 三百拾九挺

御方々様御広敷江御入之 拾五匁掛
節、御老中方・若年寄衆 貳百五拾三挺
不時御退出夜二入候節并 御門明七時

同十四年

惣ノ八百九拾五挺内

式拾目掛
貳百挺
拾五匁掛
六百九拾五挺

同断

同十一戌年

惣ノ八百五拾壹挺内

式拾目掛

同断

百五拾七挺

同断

拾五匁掛
六百九拾四挺

同十二亥年

惣ノ七百五拾七挺内

同断

式拾目掛
百三挺

同断

拾五匁掛
六百五拾四挺

同十三子年

惣ノ六百八拾七挺内

同断

式拾目掛
百九拾三挺

同断

拾五匁掛
四百九拾四挺

文政十三寅年

惣ノ五百式拾挺内

同断

式拾目掛
式百式拾式挺

同断

拾五匁掛
式百九拾八挺

天保二卯年

惣ノ五百七拾壹挺内

同断

式拾目掛
百八拾四挺

同断

拾五匁掛
三百八拾七挺

右文化九申年より同十三子年迄五ヶ年之間

ノ三千八百三拾式挺

文政十三寅年より天保二卯年迄式ヶ年之間

ノ千九拾壹挺

右両口共

ノ四千九百式拾三挺

右之通御座候、以上

辰八月

御長屋御門番
新土戸番
奥仕切番

野方御使方之分

覚

文化九申年

惣ノ百六拾挺之内

蠟燭
中拾匁掛
七拾八挺

文化十四年

惣ノ百式拾式挺之内

下拾五匁掛
式拾八挺
中拾匁掛
四拾式挺
下拾匁掛
八拾挺

文化十一戌年

惣ノ百六拾六挺之内

中拾匁掛
六拾六挺
下拾五匁掛
四拾六挺

(朱書)
「文化十二亥年分留落」

文化十三子年

惣ノ百拾挺之内

同 四拾八挺

同 六拾貳挺

文政十三寅年

惣ノ貳拾八挺之内

同 六挺

同 貳拾貳挺

天保二卯年

惣ノ三拾六挺之内

同 六挺

同 三拾挺

右文化九申年・同十四年・同十一戌年・同十二亥年・同十三子

年・文政十三寅年・天保二卯年御蠟燭請取高

惣ノ六百七拾四挺

野方御使

覚

文政十三寅年

一、遠 御成拾壹度

同年御用立候

一、中拾匁掛蠟燭三拾挺

天保二卯年

一、遠 御成数拾度

同年御用立候

一、中拾匁掛蠟燭拾八挺

右之通御座候、以上

辰八月七日

西丸野方御使

右者文化九申年より同十三子迄五ヶ年、蠟燭受取高書留不相見難

相分旨申立候事

御挑灯奉行方より山本長六借り候由三而為見候書面写左之通

御中間方

御蠟燭調書付

文化九申年正月より十二月迄御蠟燭御中間方江渡高

一、御蠟燭七百三拾八挺

三百八拾九挺

内 貳百五拾三挺

九拾六挺

貳拾匁掛

拾五匁掛

拾匁掛

一、同千七百七挺

貳百八拾四挺

内 七百五拾七挺

六拾五挺

貳拾目掛

拾五匁掛

拾匁掛

同十一戌年右同断

一、同千貳百拾八挺

貳百貳拾三挺

内 八百四拾三挺

百五拾貳挺

貳拾目掛

拾五匁掛

拾匁掛

同十二亥年右同断

一、同千八拾七挺

百五拾四挺

内 八百七挺

百貳拾六挺

貳拾目掛

拾五匁掛

拾匁掛

同十三子年右同断

一、同千拾壹挺

貳百四拾四挺

内 六百拾七挺

百五拾挺

貳拾目掛

拾五匁掛

拾匁掛

天保元寅年右同断

一、同七百四拾六挺

内 貳百貳拾壹挺

内 四百拾壹挺

百拾四挺

貳拾目掛
拾五匁掛
拾匁掛

一、同二卯年右同断

同七百七拾八挺

内 四百五拾六挺

百五拾貳挺

貳拾目掛
拾五匁掛
拾匁掛

右之通御座候、以上

辰七月

天保三辰年十月廿七日当番所小野伝左衛門江小川熊左衛門を以三

役一同差出ス

覚

文化十四丑年より文政十二丑年迄御挑灯奉行より御中間方江請取候蠟燭左之通

一、文化十四丑年正月より十二月迄請取候分

百六拾壹挺

三百四拾九挺

百八挺

貳拾目掛
拾五匁掛
拾匁掛

一、文政元寅年右同断

百六拾五挺

六百三挺

百三拾六挺

貳拾目掛
拾五匁掛
拾匁掛

一、同二卯年右同断

百五拾八挺

貳拾目掛

五百八拾壹挺

九拾六挺

拾五匁掛
拾匁掛

一、同三辰年右同断

六拾貳挺

七百九拾六挺

六拾六挺

貳拾目掛
拾五匁掛
拾匁掛

一、同四巳年右同断

百五拾六挺

八百貳拾壹挺

〔朱書〕
〔留落〕

貳拾目掛
拾五匁掛
拾匁掛

一、同五午年右同断

貳百七拾七挺

六百貳拾九挺

八拾六挺

貳拾目掛
拾五匁掛
拾匁掛

一、同六未年右同断

百三拾七挺

五百八拾七挺

九拾挺

貳拾目掛
拾五匁掛
拾匁掛

一、同七申年右同断

百六拾貳挺

四百五拾七挺

四拾八挺

貳拾目掛
拾五匁掛
拾匁掛

一、同八酉年右同断

貳百八挺

五百四拾八挺

百八挺

貳拾匁掛
拾五匁掛
拾匁掛

一、同九戌年右同断

三百九拾九挺

貳拾匁掛

五百貳拾挺
百拾四挺
拾五匁掛

一、同十亥年右同断

三百拾四挺
四百三拾五挺
七拾八挺
貳拾匁掛
拾五匁掛
拾匁掛

一、同十一子年右同断

三百貳挺
八百七拾五挺
九拾八挺
貳拾目掛
拾五匁掛
拾匁掛

一、同十二丑年右同断

貳百七拾六挺
五百六拾八挺
八拾四挺
貳拾目掛
拾五匁掛
拾匁掛

右之通御座候、以上

辰十月

御中間頭

覚

文化十四丑年壹ケ年ノ五百三挺

両丸様 通御并
御規式之節
御方々様御広敷江
貳拾目掛
百四拾四挺

内 御入之節、御老中方、

若年寄衆不時御登
城、御退出夜二入候
節并御門明七時
拾五匁掛
三百五拾九挺

文政元寅年壹ケ年ノ七百貳拾壹挺

内 同断
同断
同断
貳拾目掛
拾五匁掛
百五拾九挺
五百六拾貳挺

同二卯年壹ケ年ノ五百六拾挺

内 同断
同断
拾五匁掛
百四拾八挺
四百拾貳挺

同三辰年壹ケ年ノ七百五拾五挺

内 同断
同断
拾五匁掛
六拾挺
六百九拾五挺

同四巳年壹ケ年ノ七百五拾四挺

内 同断
同断
拾五匁掛
百四拾三挺
六百拾壹挺

同五午年壹ケ年ノ七百七拾挺

内 同断
同断
拾五匁掛
貳百三拾三挺
五百三拾七挺

同六未年壹ケ年ノ四百九拾壹挺

内 同断
同断
拾五匁掛
百貳拾貳挺
三百六拾九挺

同七申年壹ケ年ノ六百五拾三挺

内 同断
同断
拾五匁掛
百六拾七挺
四百八拾六挺

同八酉年壹ケ年ノ六百八挺

内 同断
同断
拾五匁掛
百八拾挺
四百貳拾三挺

同九戌年壹ケ年ノ七百貳拾四挺

内 同断
同断
拾五匁掛
貳百九拾八挺
四百貳拾六挺

同十亥年壹ケ年ノ六百挺

内 同断
同断
拾五匁掛
三百貳挺

同断	拾五匁掛	貳百九拾八挺	一、同	四拾四挺
同十一子年壹ケ年ノ八百三拾挺				中拾匁掛
同断	貳拾目掛	貳百貳拾五挺	一、同	三拾六挺
内	拾五匁掛	六百五挺	同四巳年	下拾五匁掛
同断			一、同	三拾挺
同十二年壹ケ年ノ六百九拾九挺				中拾匁掛
同断	貳拾目掛	貳百五拾壹挺	一、同	三拾六挺
内	拾五匁掛	四百四拾八挺	同五午年	下拾五匁掛
同断			一、同	三拾挺
貳拾目掛ノ貳千四百三拾七挺				中拾匁掛
拾五匁掛ノ六千貳百六拾八挺			一、同	貳拾四挺
二口ノ八千六百六拾八挺			同六未年	下拾五匁掛
辰十月			一、同	貳拾六挺
		御長屋御門番		中拾匁掛
		新土戸番	一、同	三拾六挺
		奥仕切土戸番	一、同	中拾匁掛
覚			同七申年	下拾五匁掛
文化十四丑年	下拾五匁掛		一、同	四拾挺
一、蠟燭	貳拾六挺			中拾匁掛
	中拾匁掛		一、同	貳拾四挺
一、蠟燭	拾八挺		同八酉年	下拾五匁掛
同十五寅年			一、同	四拾八挺
文政元年	下拾五匁掛			中拾匁掛
一、同	貳拾四挺		一、同	拾貳挺
	中拾匁掛		同九戌年	下拾五匁掛
一、同	七拾貳挺		一、同	四拾八挺
同二卯年	下拾五匁掛			中拾匁掛
一、同	三拾六挺		一、同	三拾六挺
	中拾匁掛		同十亥年	下拾五匁掛
一、同	六拾挺		一、同	三拾六挺
	下拾五匁掛			中拾匁掛
同三辰年	下拾五匁掛		一、同	拾八挺

同十一子年

下拾五匁掛

一、同

四拾八挺

中拾匁掛

一、同

拾八挺

同十二丑年

下拾五匁掛

一、同

三拾六挺

中拾匁掛

一、同

拾貳挺

一、惣高

中拾匁掛

四百貳挺

下拾五匁掛

四百八拾挺

右之通御座候、以上

十月

覚

文化十四年丑年

中拾匁掛

一、蠟燭

三拾挺

文政元寅年

中拾匁掛

一、同

四拾八挺

同二卯年

中拾匁掛

一、同

三拾挺

同三辰年

中拾匁掛

一、同

拾八挺

同四巳年

中拾匁掛

一、同

三拾六挺

同五午年

中拾匁掛

一、同

三拾挺

同六未年

中拾匁掛

一、同

拾八挺

同七申年

中拾匁掛
貳拾四挺

一、同

同八酉年

中拾匁掛
三拾挺

一、同

同九戌年

同断
拾八挺

一、同

同十亥年

同断
三拾挺

一、同

同十一子年

同断
拾八挺

一、同

同十二丑年

同断
四拾八挺

惣高三百七拾八挺

右之通御座候、以上

西丸

野方御使

十月

御挑灯奉行江相頼写貫ひ候書面左之通

御中間方調

御挑灯奉行

覚

文化十四丑年壹ヶ年分

六百拾八挺内

貳拾匁掛
拾五匁掛
拾匁掛

百六拾壹挺

三百四拾九挺

百八挺

此方分

五百七拾七挺

御挑灯奉行之方

差引四拾壹挺多シ

文政元寅年

ノ九百四挺内

式拾目掛 百六拾五挺
拾五匁掛 六百三挺
拾匁掛 百三拾六挺

同二卯年

ノ八百三拾五挺内

式拾目掛 百五拾八挺
拾五匁掛 五百八拾壹挺
拾匁掛 九拾六挺

同三辰年

ノ九百貳拾四挺内

式拾目掛 六拾貳挺
拾五匁掛 七百九拾六挺
拾匁掛 六拾六挺

同四巳年

ノ千百七挺内

式拾目掛 百五拾六挺
拾五匁掛 八百貳拾壹挺
拾匁掛 百三拾挺

同五午年

ノ九百九拾貳挺内

式拾目掛 貳百七拾七挺
拾五匁掛 六百貳拾九挺
拾匁掛 八拾六挺

ノ八百六拾貳挺
差引百三挺多シ

ノ八百五拾六挺
差引貳百五拾壹挺多シ

ノ八百五拾三挺
差引七拾壹挺多シ

ノ六百八拾六挺
差引百四拾九挺多シ

ノ八百六拾五挺
差引三拾九挺多シ

同六未年

ノ八百拾四挺内

式拾目掛 百三拾七挺
拾五匁掛 五百八拾七挺
拾匁掛 九拾挺

同七申年

ノ六百六拾七挺内

式拾目掛 百六拾貳挺
拾五匁掛 四百五拾七挺
拾匁掛 四拾八挺

同八酉年

ノ八百六拾四挺内

式拾目掛 貳百八挺
拾五匁掛 五百四拾八挺
拾匁掛 百八挺

同九戌年

ノ千三拾三挺内

式拾目掛 三百九拾九挺
拾五匁掛 五百貳拾挺
拾匁掛 百拾四挺

同十亥年

ノ八百貳拾七挺内

式拾目掛 三百拾四挺
拾五匁掛 四百三拾五挺
拾匁掛 七拾八挺

ノ六百四拾八挺
差引百四拾三挺多シ

ノ八百貳拾六挺
差引貳百七拾挺多シ

ノ六百四拾三挺
差引百貳拾壹挺多シ

ノ七百四拾壹挺
差引七拾四挺多シ

ノ五百七拾壹挺
差引貳百四拾三挺多シ

同十一子年

メ千弍百七拾五挺内
拾五匁掛
拾五匁掛
三百弍挺
八百七拾五挺
九拾八挺

メ九百拾四挺
差引三百六拾壹挺

同十二丑年

メ九百弍拾八挺内
拾五匁掛
拾五匁掛
二百七拾六挺
五百六拾八挺
八拾四挺

メ七百九拾五挺
差引百三拾三挺多シ

惣メ壹万千七百八拾八挺

此方三口請取高

メ九千九百弍拾八挺

差引

御挑灯奉行の方メ

千八百六拾挺多シ

右之通此方調上り之書付ニ而御門番三ヶ所・野方御使・西丸野方御使より銘々書付出シ書面相濟

(朱書)
「弍百拾八」

天保三辰年八月二日山岡五郎作殿山崎又兵衛江被申渡候ニ付書面
鱒付返上、右ニ付即日弥六江申渡、尤御小人目付格与認メ来候得
共、御中間目付格与申渡

鈴木宇右衛門組
御中間在方出役

田野村弥六

右弥六在方出役之儀万端心附出情相勤候ニ付、御小人目付格在
方出役頭取申渡候

八月

(朱書)
「弍百拾九」

天保三辰年八月右壺通当番所小幡万兵衛江役付認メ同月十日遣
ス、翌十一日見習勤訳并御中間人数与認メ遣ス

覚

御中間三組惣人数五百五拾五人

内

古沢茂右衛門組御中間

内 百三拾三人

内 御中間目付拾弍人

鈴木宇右衛門組同断

内 弍百五拾壹人

内 同断 弍拾三人

山崎又兵衛組同断

内 百七拾五人

内 同断 拾五人

外ニ見習 壺 人

右之通御座候、以上

辰八月

御中間頭

(朱書)
「弍百拾の上」

天保四巳年正月廿四日御達書掛りを以被遣候ニ付承付返却

御中間頭江

明廿五日於朝鮮馬場流鏑馬馬渡、引統射騎挾物稽古有之候ニ付、馬口附之者御中間六拾人朝七ツ半時植溜江相揃候様可申渡候事

正月廿四日

山岡五郎作
堀田式部

〔朱書〕
〔同下〕

同断同月同日右御達書御徒押より廻し来、承付当番所江返却

来月二日於高田馬場流鏑馬之節御賦被下候之旨、伺之通被仰渡候ニ付右場所江罷出候支配向人数取調早々可差出候事

正月

山岡五郎作
堀田式部

〔朱書〕
〔式百式拾壹〕

天保四巳年二月五日周防守殿田中竜之助を以御下ケ、小四郎殿被遣

一、二丸御風呂屋是迄御台所脇御長屋御門ならびに有之候処

千三郎殿御門ニ相成、御風呂屋口者御台所脇御長屋之内ニ附替り候ニ付、近日 御成有之候間諸事差支無之様別而台・御挑

灯等出し方御中間・御小人申合候様小川伊兵衛江申聞候ニ付、仁兵衛申談早々定藏江相談致し候様申談遣し候

〔朱書〕
〔式百式拾貳〕

天保四巳年二月九日五郎作殿石川三太夫を以御達

一、千三郎殿当月廿七日・廿八日頃之内二丸江御引移、其後も 御

本丸江一ヶ月二両三度宛も御出被成候節も御行列御同様之旨石川三太夫申聞候 右御行列延享二丑年 万次郎殿二丸江御引

移之節之通、尤御人之義者 御本丸より御雇ニ而相勤候由書留有之候ニ付、此度も右之通ニ而差支無之哉、左候へハ其段五

郎作殿より御申上被成候ニ付、早々否可申聞旨石川三太夫より掛合有之候

延享二丑年掛り

御目付

駒井鞞負

御小人目付

御小人目付

御徒目付

添番 奥向之面々

御数寄屋坊主

御傘

御挟箱

御駕籠

御草履取

御茶弁当

御傘

御雨覆

同

奥向之面々

御徒目付

御小人目付

御傘

御挟箱

鈴木

山崎

古沢

廻状申上候 千三郎殿御行列書ニ而者平之方ハ御持鎗之者計御座候得共、御駕籠御注進敷又者附人敷可有之候得共、是以格別之人数ニも有間敷、御引移以後ハ丈夫ケ御人平日日々当置不申候而者相成申聞敷、右等之所弥市左衛門江申談、定藏江も委細申

談、明日鈴木より否申上候様談置候、尚明日定藏江可然可談候

二月九日

延享二丑年掛り

御目付 駒井靱負

御小人目付 御徒目付

添番 奥向之面々 御数寄屋坊主

御傘 御挟箱

御草履取 御茶弁当 御鎗立不申候 御雨覆

御傘 御挟箱

同 奥向之面々 御徒目付 御小人目付

同 御小人目付

同 御小人目付

天保四巳年十一月九日左之通

千三郎殿当月廿七八日頃之内二九江御引移、其後も 御本丸江

一ヶ月二両三度宛も 御出被成候節も御行列御同様之旨石川三

太夫申聞候

右行列延享二丑年

万次郎殿二九江御引移之節之通、尤御人之儀者 御本丸より御

雇ニ而相勤候由書留有之候ニ付、此度も右之通ニ差支無之哉、

左候得者其段五郎作殿江御申上被成候ニ付、早々否可申聞旨石

川三太夫より掛合有之候

天保四巳年二月十四日山崎より別封

千三郎殿御雇人着服之儀懸り御小人目付より御徒目付江相咄候

ニ付、頭取より茂一寸三太夫江咄し呉候様申聞候間三太夫江相

咄し候処、宝曆度宮内卿殿清水屋形引移之節之例ニ而も宜旨申

聞候ニ付御使組頭七右衛門御納戸より書拔参り候処、先的例之

通申聞前田彦十郎江も同様可申哉着服も出来可申哉之由

天保四巳年二月十一日御用所石川三太夫より達、尤着服之儀者

万次郎殿之節請取候ハ、此度も可相濟候而も可然旨申聞候

千三郎殿御引移之節御供御雇

一、添番 四人 一、御徒目付 式人

一、御数寄屋坊主 壹人 一、御小人目付 三人

一、御しらせ御使之者 三人 一、御持鎗御中間 式人

内手替 壹人

一、御草履取 壹人 一、御傘持御小人 式人

一、御挟箱持御小人 四人 一、御雨覆御小人 式人

一、御駕籠之者 拾人 一、御露路之者 三人

内世話役 壹人

右之通 御しらせ

一、御広敷江被成 御本丸 一、二九江被成 御本丸

御出候由 二九江 御入候由 御広敷江

巳二月

天保四巳年二月右書面小野伝左衛門より差越承付返却、右ニ付明

後廿五日御普請掛り・御徒目付夫より御中間頭江引渡候様五郎殿

被仰聞候旨、揃刻限之義者尚又相達可申旨当番所より申聞候間組

頭江申渡置候

肥後守殿

二丸御構江此度新御門御普請出来ニ付

引渡候之義申上候書付

松平内匠頭

明楽飛驒守

織田阿波守

下田幸太夫

二丸御構江此度新規御門御普請出来仕候処、右御門之儀者御目

付持ニ付右向江引渡候様大久保筑前守申聞候間、明後廿五日引渡申度奉存候、其段御目付江被仰渡可被下候、此段申上候、以上

二月廿三日

天保四巳年二月

御目付衆

千三郎殿御引移後御登 城之節御附より御達可申候ニ付、右様心得御附之者より御達申次第、御供之者相廻し候様取計可被成候、依之御達申候

二月

大久保筑前守

天保四巳年二月右御達写高倉助五郎より差越承付返却致し、右之通達有之節々二丸当番所より相達候旨申聞候、右者御達之砌御使組頭江達有之候様致し度段申聞候

古沢茂右衛門組

触番世話役之者

浅井留吉

鈴木宇右衛門組

定番之者

和田安太郎

同人組

昼番之者

石原健次郎

山崎又兵衛組

定番之者

山本紋次

右者此度二丸新御門新規出来ニ付御同所御台所脇御長屋御門番

江四人増人、右可申渡旨五郎作殿被仰渡候、書面ヒレ付返上

御書面之通可申渡旨被仰渡奉承知候

御中間頭

巳二月廿六日

鈴木宇右衛門

天保四巳年二月晦日廻状より留置

小林八兵衛江差出候

此度 千三郎殿二丸江御引移被為 在候処、御供者勿論其外御本丸奥向同様、奥附御人断出候ニ付定式人数ニ而者手不足申候ニ付、日々三人ツ、御用方御雇仕度奉存候、并非常之節驅附四人之内式人者御用方ニ而相心得候様、是又被仰渡被下置候様奉願候、以上

二月廿八日

御小人目付

世話役

天保四巳年三月二日右之通書面ニ致し差出候様申聞候ニ付万兵衛差出申候

一、千三郎殿 御本丸江 御入之節御供揃一時早ニ被 仰出候ハ、

御差支無御座候、以上

三月二日

黒鍬之者頭

御中間頭

御小人頭

天保四巳年三月右書面御部屋より被遣候由ニ而、当番所より差越候間下ケ札致し御部屋弁佐江遣ス

御目付方

御勘定所

一、次櫓欄幕 壹本 一、手桶切蓋共 壹ツ

一、搔器 壹本 一、鉄行灯 但掛戸附小道具共 壹ツ

一、灯油 二月より八月迄 九月より正月迄
一、夜六勺五才 一、夜七勺五才

右品々二丸新御門出来ニ付此度も御請取被成度之旨、御書面肥後守殿御勘定所江御下ケ被成候、尤新規之義ニ候間外御番所江も右品々相渡居候哉承知致し度、此段及御掛合候

書面之品々何れも前々より御中間方外御番所江請取候ニ付、此度も同様申上候儀ニ御座候

御中間頭 古沢茂右衛門

(朱書) 一、式百廿三

天保四巳年三月廿二日右御達書西丸掛りより差越、承付致し組頭ヲ以返却

御中間頭江

一、明廿三日六郷筋江 内府様 御成之節

御目付

水野舎人

御使番御雇

長田六左衛門

両御番組頭

永井十郎左衛門

諏訪数馬

御徒頭

落合能登守

小十人頭 池田修理

○鈴木宇右衛門承之

右 御早乗之御場所より騎馬ニ而致御供候間、右之面々手馬浜川ニ而相渡候ニ付攀人差出可申候事、但攀人之者於場所ニ向々江相届可申事

三月

中根平十郎

(朱書) 一、式百廿四

天保四巳年三月右書面西丸より差越承付返却

黒楸之者頭

御中間頭 江

御小人頭

初之丞殿山王宮参之節山王 御本丸御先勤并御供之分人数書可差出候事

三月

堀田式部 中根平十郎

(朱書) 一、式百廿五

天保三辰年十一月五日高橋金藏御殿地内明長屋拝借願

以書付奉願上候

一、私儀只今迄拝領屋敷無御座候ニ付本所菊川町高橋金一郎方ニ同居仕罷在候処、浜御殿地内御普請役池永林次郎住居仕候処、勝手ニ付御長屋差上当十月外宅致し候間、跡明キ御長屋当分之内

私義拝借仕度奉存候、尤御長屋拝借中破損等之義者自分ニ而手
入仕居候、此段奉願上候、以上

天保三辰年十一月

高橋金藏 印

鈴木宇右衛門殿

覚

西丸番之頭支配

山里伊賀之者

平田儀兵衛

天保二卯年三月十九日浜御殿地内東御長屋坂間亀五郎跡明キ御
長屋引替被下置候様願書頭衆江差出申候処、願之通被下置候旨
同年五月廿七日水野越前守殿御附札を以願之通拝借被 仰付候
旨、御留守居衆松平内匠頭殿申渡候段佐野織部申渡候

覚

吹上御庭方

芦沢平左衛門

一、私儀浜御殿番岩田左右衛門方ニ同居仕罷在候処、浜御殿地内東
御長屋岡村茂十郎住居仕候跡明キ御長屋当分之内私儀拝借奉願
文政四巳年五月願書差出申候、七月九日進達ニ相成候、同月廿
七日願之通撰津守殿御書付を以被仰渡候段河合次郎右衛門申渡
右御長屋拝借仕罷在候、以上

見出し、浜御殿御長屋拝借類例書付

覚

吹上御庭方

芦沢平左衛門

右平左衛門義拝領屋鋪無御座候得共、勝手ニ付浜御殿番岩田左
右衛門方ニ同居罷在候処、東御長屋拝借住居罷在候岡村茂十郎
儀外宅仕候ニ付、文政四巳年五月右明跡御長屋拝借奉願候処、
同年七月九日御進達ニ相成、同月廿七日撰津守殿御書付を以被
仰渡候旨河合次郎^{次郎右方}左衛門申渡、御長屋拝借今以住居罷在候間此段
類例申上候、以上

辰十一月

覚

天保二卯年三月十九日

平田儀兵衛拝借御長屋引替被下置候様願書頭衆江差出申候処、
願之通被下置候旨同年五月廿七日水野越前守殿御附札を以願之
通拝借被 仰付候旨御留守居衆松平内匠頭殿申渡候段佐野織部
申渡候

十一月

平田儀兵衛

天保三辰年十一月十日浜差添勤荒井吉五郎相頼此文通遣又

吉村又八郎様

鈴木宇右衛門

以手紙啓上仕候、追日寒冷罷成候処益御安泰被成御勤仕奉慶候、
然者浜御殿地内罷在候御普請役池永林次郎此度勝手ニ付外宅致
し右跡御長屋明キ相成候間、拙者組御中間高橋金藏拝借仕度旨
願出申候、右之趣相違も無御座願候得者拝借被 仰付候筋合之
御長屋ニ而御座候哉、且又右御長屋者元御入用ニ而出来仕居候義

二候哉、又者御地所計り拝借仕自分家作ニ而住居仕候義ニ御座候哉、是等之義も承知仕度奉存候、何卒乍御面倒貴答被仰下候様仕度奉願候、已上

十一月十日

追啓、本文之趣願候而被 仰付候筋ニ貴答被仰下候得者直

ニ願書差出申度奉存候、依之進達書面振合も入御覽申候間 是又主意ニ違ひ文言等有之候処者御加筆被下候様仕度奉願候

浜御殿地内御長屋拝借之儀奉願候書付

覚

鈴木宇右衛門組
御中間

高拾五俵

新規御抱人之者

高橋金蔵

老人扶持

右金蔵儀、此度御普請役池永林次郎差上候浜御殿地内明キ御長屋当分之内拝借仕度旨相願申候、何卒可相成儀ニ御座候ハ、金蔵江拝借被 仰付被下置候様仕度奉願候、以上

辰十一月

御中間頭
鈴木宇右衛門

宇右衛門様

又八郎

拝答

御手紙拝見仕候、如貴命追而寒冷相成候得共弥御壯安被成御座奉寿候、然ハ浜御殿地内御長屋拝借住居罷在候御普請役池永林次郎、此度勝手ニ付外宅致し候趣被仰下候処、未右御長屋差上不申候、尤先月下旬近々外宅致し候趣内々承置候、右御長屋一

両日中ニ者明キ可申与奉存候、右ニ付御組高橋金蔵拝借願度段委細被仰下承知仕候、拝借出来不出来之義治定難及御答候、拝借御長屋向者一統自分修復ニ而致住居候儀ニ御座候、右之趣貴答迄如此御座候、何れ貴顔之節余ハ可申上候、以上

十一月十三日

追啓、本文之趣可被仰付哉之筋是又御答申上兼候、是迄先例其外間違候儀共有之候義、何れ御面談之節与奉存候、本文申上候通未御長屋請取不申候、御願書拝見、右可然奉存候、此方ニ振合等一向相見不申候、則返上

天保三辰年十一月金蔵浜御殿御長屋拝借ニ付

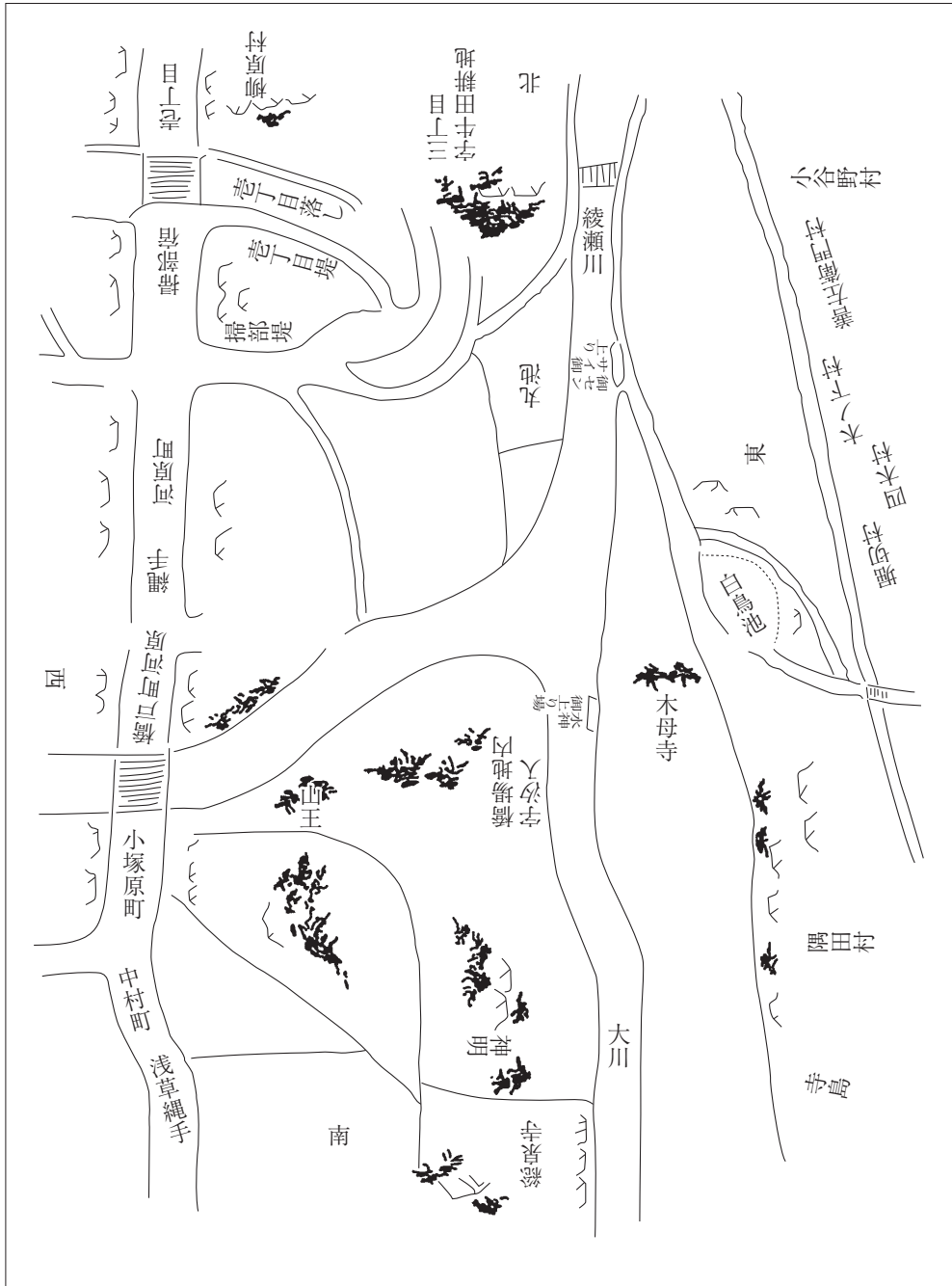
例書

吹上御庭方

芦沢平左衛門

右者岡村茂十郎拝借罷在候浜御殿地内東御長屋差上明キ罷成候節、右平左衛門儀当分拝借仕度段文政四巳年五月奉願候処、同年七月願之通被仰付候旨撰津守殿御書付を以被仰渡候段、河合次郎右衛門申渡候

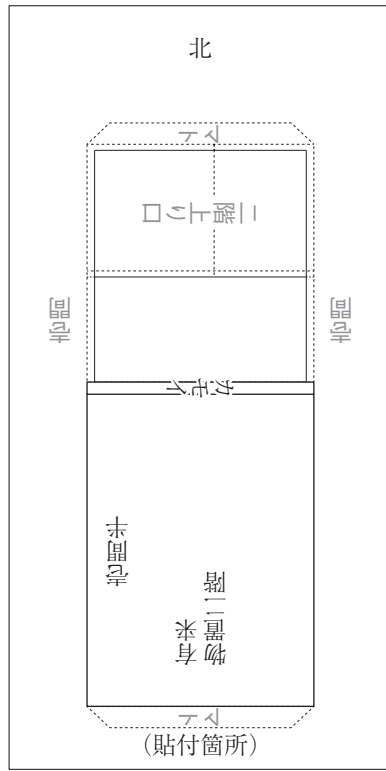
「百六拾式」挿入図



「百六拾四」挿入図二図

西丸御長屋御門御番所絵図（二階継足間取図）

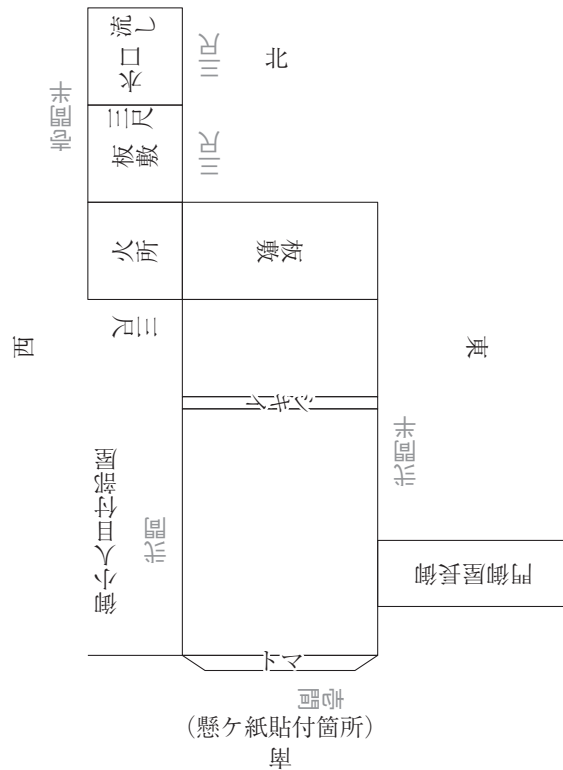
（懸ヶ紙）



註 此等の図は原図の書入れ寸法にもとづき原図の形状修正をしてある

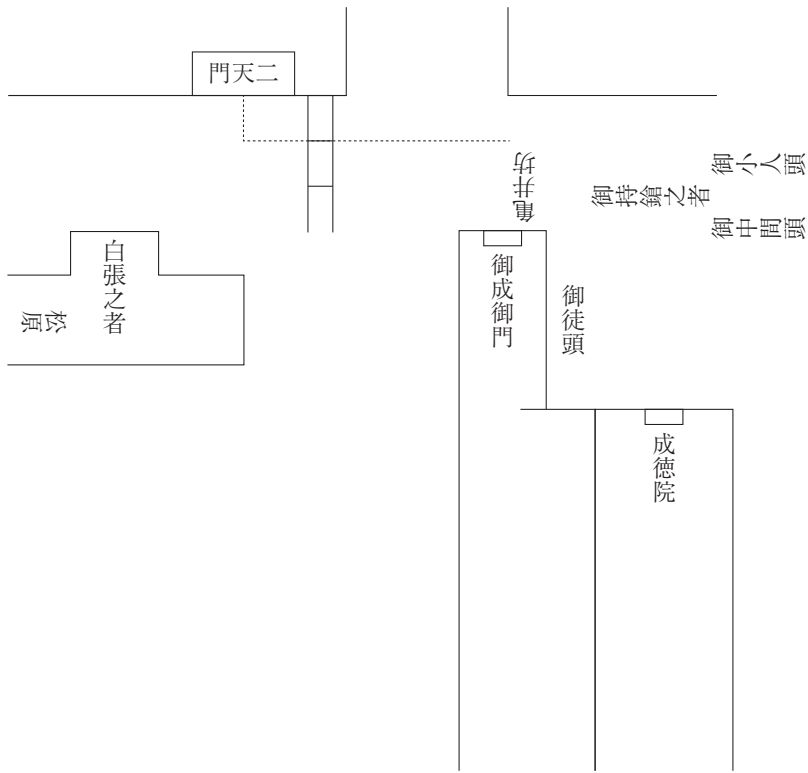
.....（朱引）
 ゴシック体文字（朱書）
 ┌ 二階継足部分を表す

西丸御長屋御門御番所絵図（一階間取図）

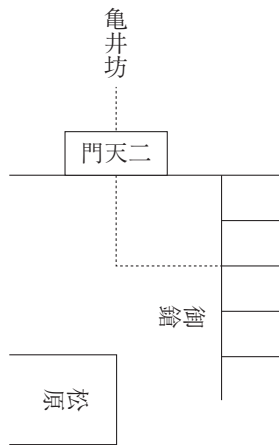


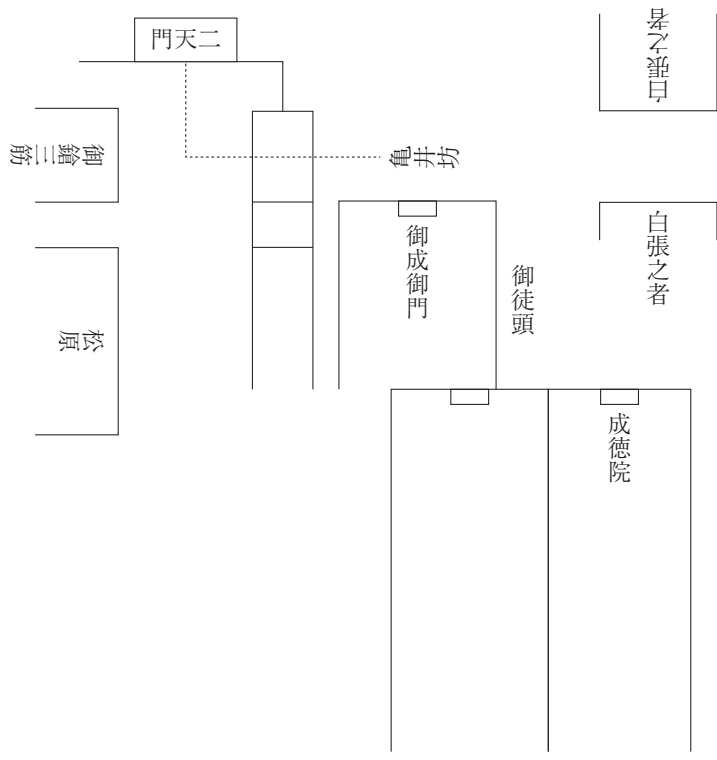
「百七拾」挿入図次頁を含め三図

惣 御靈屋 御參詣之節、仮御装束所前御供建場共ニ
御目見場所絵図画



有章院様 御靈屋江 御參詣相濟仮御装束所被為 入候節、
惇信院様 御目見場所絵図面左之通
二天門外御供建場



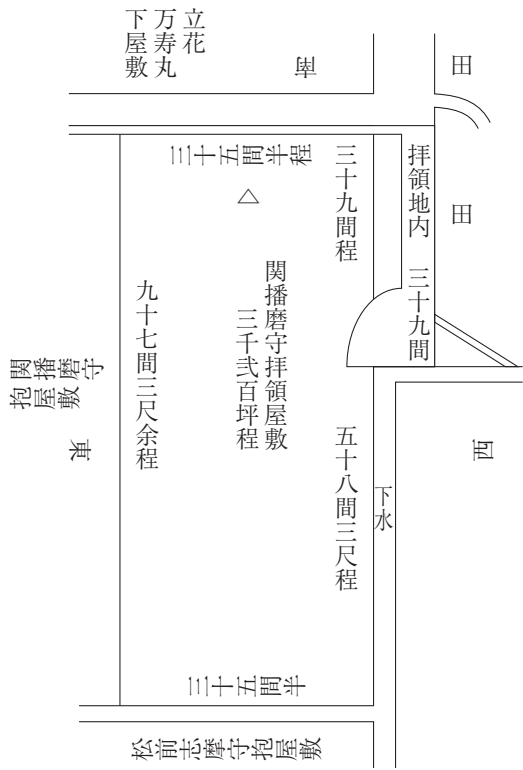


惣 御靈屋江 御參詣相濟 御装束所江被為 入候節、
 御供建場共ニ御目見場所

「式百七」挿入図

(朱書)
「見出し」
屋敷奉願候絵図

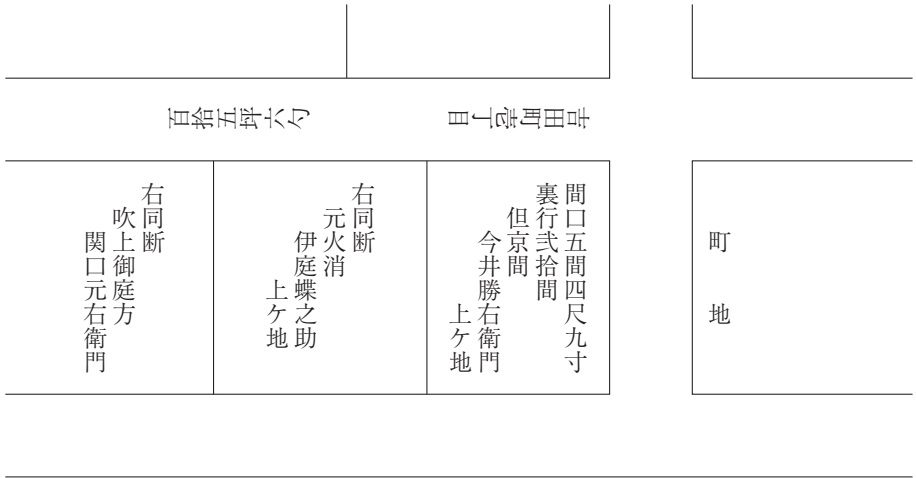
月番 佐藤市左衛門
大久保讃岐守



(朱書)
「右絵図美濃紙壹枚ニ認、
堅ニ式ツ折又横ニ式ツ
折、四半ニ成、是を三ツ
折ニいたし見出し認候事」

(朱書)
「掛ヶ紙」
此内ニ而坪数相応被下置候
様仕度奉願候
御中間頭
古沢茂右衛門

「式百拾壹」挿入図



敷 屋 下